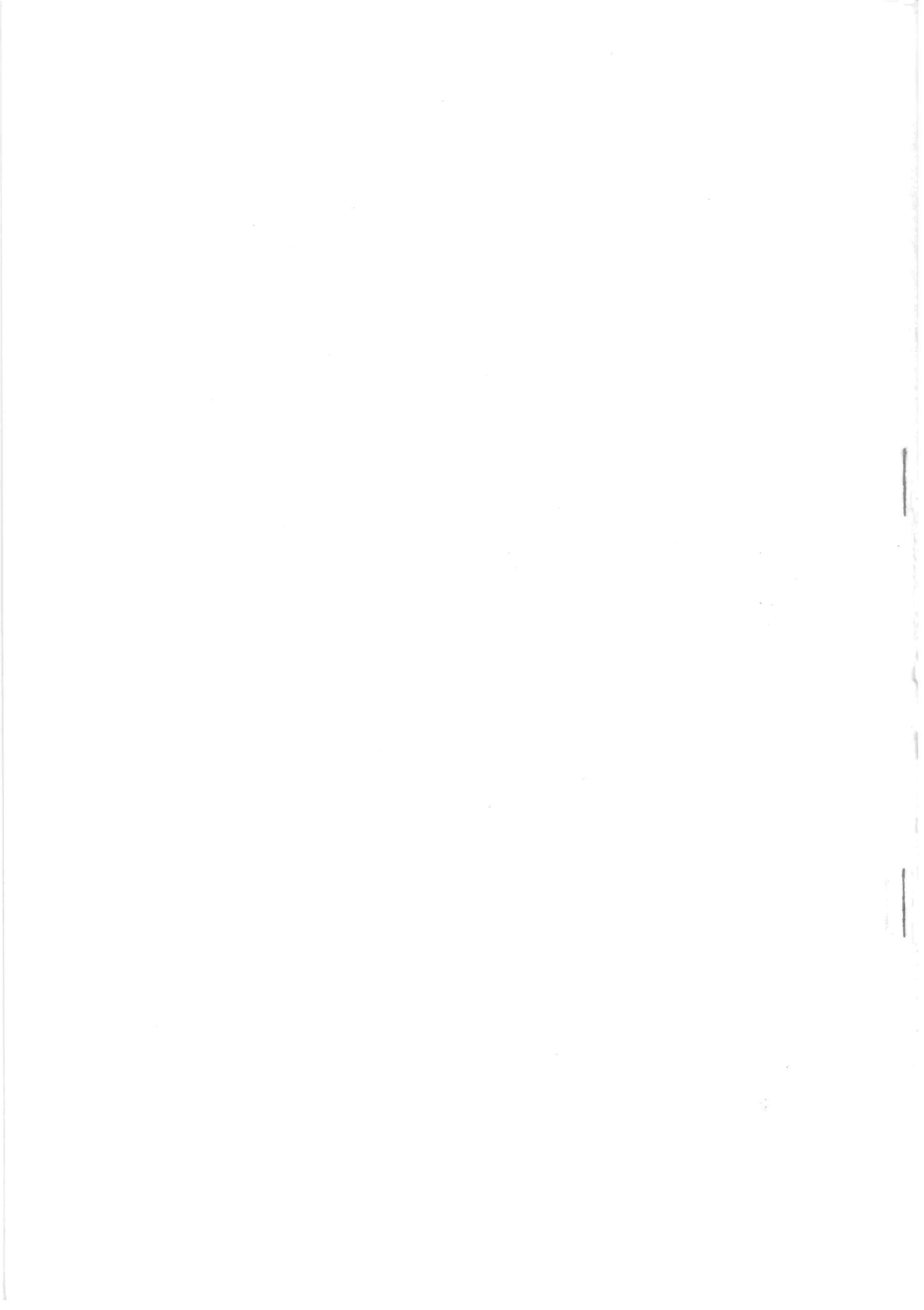


戸田市文化財調査報告Ⅴ

南原（高知原）遺跡第2・3次発掘調査概要

埼玉県戸田市教育委員会



序

この南原遺跡の第1次調査（昭和44年度）では、戸田市にとって思いもかけなかった“埴輪——人物の頭部——”が偶然にも一トレンチ内から発見され、驚嘆したところであります。

このたび、第2次調査、第3次調査が行われ、竪穴住居跡や方形周溝墓、さらに埴輪にかわり土器の出土がみられた円形周溝墓の発見、はたまた、第3次調査ではE地区において柱穴列や土壙群が発見され、平安時代の館跡と推定もなされるなど、各時代の遺構が、この狭い「高知原」にあったとは、市民のどれだけの方々が知っていたのでしょうか。これぞ“考古学の驚異”とでも云うものなのでしょうか。

このように、地下からの発見物（遺構や遺物）によって、郷土戸田の歴史が次々と塗りかえられて行きます。

ここに調査概要が成るにあたり、炎暑の中、寒風吹きすさぶ中調査に参加された学生諸君に深く感謝申しあげるとともに、本書が多くの方々によって有効に活用され、学術文化の発展に寄与することを願わずにはられません。

昭和47年3月

戸田市教育委員会教育長

岡 田 弘

例 言

- 1 本書は、戸田市南町所在の南原（高知原）遺跡の、第2次・第3次発掘調査の概要である。
- 2 発掘調査は、戸田市教育委員会が主体となり、次の時期に実施した。
第2次発掘調査 昭和45年7月25日～昭和45年8月5日
第3次発掘調査 昭和47年2月14日～昭和47年2月23日
- 3 発掘調査の担当者は下記の者である。
塩野 博（日本考古学協会会員）
伊藤 和彦（戸田市教育委員会）
- 4 出土品の整理は、担当者の指導で、発掘参加者が行った。
- 5 写真は、発掘担当者が撮影したものである。
- 6 本書の執筆は、文末に銘記したものが行なったが、文責は塩野 博が負うものである。
- 7 本書の編集は、戸田市教育委員会社会教育課が行なった。

戸田市文化財調査報告 V

南原(高知原)遺跡第2・3次発掘調査概要

目 次

序	教育長 岡 田 弘
例 言	
I 南原遺跡第2・3次発掘調査の経緯	1
1 南原遺跡の調査区	1
2 第1次発掘調査の成果	2
3 第2・3次発掘調査の経過	3
II 南原遺跡A地区の発掘調査(第2次)	4
1 A地区の遺構概観	4
2 A地区の遺構各説	4
3 A地区の出土遺物各説	12
III 南原遺跡B地区の発掘調査(第2次)	16
1 B地区の遺構概観	16
2 B地区の遺構各説	16
3 B地区の出土遺物各説	19
IV 南原遺跡D地区の発掘調査(第3次)	21
1 D地区の遺構概観	21
2 D地区の遺構各説	22
3 D地区の出土遺物各説	25
V 南原遺跡E地区の発掘調査(第3次)	31
1 E地区の遺構概観	31
2 E地区の遺構各説	32
3 E地区の出土遺物各説	35
VI 結 語	37

図 版 目 次

- 図版 一 南原遺跡 A 地区
(1) A 地区 (2 次) 遺構全景
(2) 南原第 1 号住居跡
- 図版 二 南原遺跡 A 地区
(1) 南原第 2 号住居跡
(2) 南原第 3 号住居跡
- 図版 三 南原遺跡 A 地区
(1) 南原第 3 号住居跡 (床面) 土器出土状態
(2) 南原第 3 号住居跡 (貯蔵穴内) 土器出土状態
- 図版 四 南原遺跡 A 地区
(1) 南原第 4 号住居跡
(2) 南原第 4 号住居跡
- 図版 五 南原遺跡 A 地区
(1) 南原第 3 号方形周溝墓
(2) 南原第 3 号方形周溝墓南溝
- 図版 六 南原遺跡 A 地区
(1) 南原第 4 号方形周溝墓
(2) 南原第 5 号方形周溝墓
- 図版 七 南原遺跡 A 地区
(1) 南原第 2 号方形周溝墓・南原第 1 号古墳周堀
(2) 南原第 1 号円形周溝墓および土器出土状態
- 図版 八 南原遺跡 B 地区
(1) 南原第 5 号住居跡
(2) 南原第 6 号方形周溝墓
- 図版 九 南原遺跡 B 地区
(1) 南原第 5 号住居跡ピット内土器出土状態
(2) 南原第 6 号住居跡土器出土状態
- 図版 十 南原遺跡 D 地区
(1) 南原第 8 号住居跡
(2) 南原第 8 号住居跡
- 図版 十一 南原遺跡 D 地区
(1) 南原第 7 号方形周溝墓
(2) 南原第 7 号方形周溝墓周溝断面
- 図版 十二 南原遺跡 D 地区
(1) 南原第 7 号方形周溝墓溝内土器出土状態
(2) 南原第 7 号方形周溝墓溝内土器出土状態
- 図版 十三 南原遺跡 D 地区
(1) D 地区大型ピット
(2) D 地区大型ピット
- 図版 十四 南原遺跡 E 地区
(1) E 地区内調査区全景
(2) 方形柱穴別
- 図版 十五 南原遺跡 E 地区
(1) 第 16 号土壙全景
(2) 第 16 号土壙内土器出土状態
- 図版 十六 南原遺跡 E 地区
(1) 第 17 号土壙全景
(2) 第 17 号土壙内土器出土状態

I 南原遺跡第2・3次発掘調査の経緯

1 南原遺跡の調査区

南原遺跡は、埼玉県戸田市南町に所在する。この地は、「高知原（たかちっばら）」と呼ばれ、古くから土器片の散布が知られていた。全体的に平坦な低地に位置している戸田の地にあっても、いくぶんか起伏の窺える場所である。すでに土地区画整理事業も完了し、整然としているが、都市計画上の工場・倉庫等の企業地にあてられた地域で、すでにいくつかの工場や倉庫が建設され、操業を始めている。

南原遺跡は、標高約5mの旧入間川（現荒川）の流路に並行して発達した、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする、細長い自然堤防上に位置する。遺跡の範囲はかなり広範囲を占めるものであり、個人住宅や倉庫・工場が建設されてはいるが、まだ畑地が多く残っており、調査の便宜上、区画整理上の四つの区画を中心として、次のようにA～F地区に分けた。

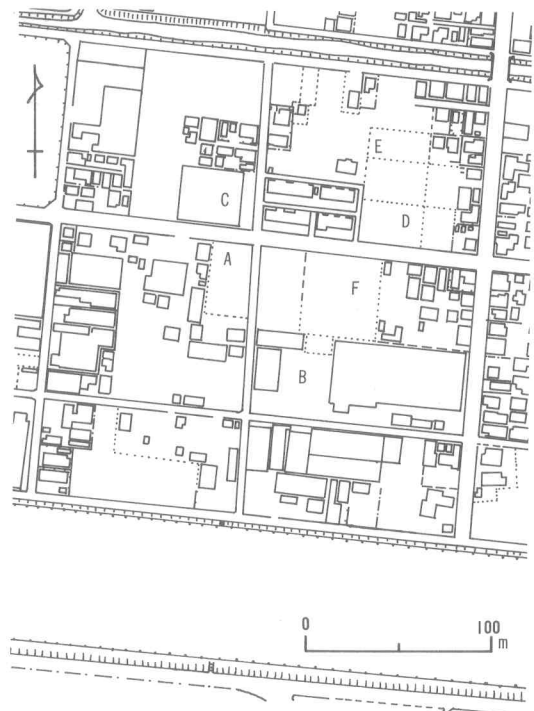
A地区 昭和44年度に第1次調査、および45年度第2次調査を実施した地区である。この地区の西側（現在工場敷地）は、低地となっており、かつては出水による浸水地帯である。

B地区 四方を倉庫に囲まれてしまった狭い地区である。この地は、倉庫建設中に、土器の破片を発見した場所であり、45年度（第2次調査）発掘調査を実施した。

C地区 倉庫建設中に鬼高式土器（長甕形土器）が発見された地区である。現在、倉庫および個人住宅地となっている。これらの建物群の西側および北側は低地で、昭和45年ごろまでは水がたまり、沼状を呈していた。

D地区 現在畑地で、今回の調査（第3次調査）実施地区である。この地区は、東側の住宅地に向って傾斜しており、地形的には、A・C地点とは反対側で、自然堤防の肩の部分にあたる。

E地区 D地区の北側に当る地区である。この地区の北側に菖蒲川が東流しているが、この川の南側は、かつてC地区の西および北側と同じ沼地となっていたところであり、現



第1図 南原遺跡調査地区図

在でも沼であった名残りの窪みがみられる。

F地区 昭和47年度に第4次調査を予定している地区で、A地区の東、B地区の北側にあたる。なお、この地区もD地区と同じように東に向かって傾斜している。

以上のように、南原遺跡は、西と東側、および北側に低地をひかえた、南北に細長い自然堤防上に立地している遺跡である。(塩野 博)

2 第1次発掘調査の成果

昭和44年度に、A地区の北側約3分の1について発掘調査を実施した。この調査概要は、すでに市教育委員会で発刊してあるところであるが、第2・3次発掘調査も、同一地区および近接地区であるので、ここに第1次発掘調査の成果を略述する。

方形周溝墓の発見 戸田市内では、昭和42・43年度に発掘調査を実施した鍛冶谷・新田口遺跡で、12基の方形周溝墓を発見した。ここでは、方形周溝墓の平面形態を3つに大別し、その形態の変遷を把握することができた(註2)。

この南原遺跡では、1基発見した(南原第1号方形周溝墓)。その形態は、溝の幅が狭く、浅いもので、全体の平面プランは楕円形を呈し、東溝中央部が開いている形態のものであり、「鍛冶谷・新田口Ⅲ形態」の鍛冶谷第3・4号、新田口第3・6号と同形態である。

溝内からの出土品は、すべて土器類であったが、溝底に置かれた状態を呈するものはなく、北溝および南溝の南コーナー付近に破砕された状態で出土した。

第1次調査では、一基しか発見できなかったが、この地域には、まだ数基の方形周溝墓が発見できるものと推定された。

古墳の周堀発見 今までに知られていた県南荒川下流域左岸の古墳群は、大宮市日進地区から三橋地区の並木・側ヶ谷戸、植水地区の佐知川・水判土、さらに与野市を経て、浦和市大久保に至る細長い地域にわたる台地や自然堤防上に分布し、県南地域の代表的な古墳群とされていた。

戸田市の乗る標高5m弱の自然堤防上にも一基の円墳が現存するので、他にも古墳のあることは想定されてはいた。はからずも、南原遺跡A地区において、人物埴輪頭部、人物埴輪の部分破片、円筒埴輪を有する古墳の周堀(南原第1号古墳)が発見された。また、この周堀内からは、土師器や須恵器杯(Ⅲ型式末に比定できる)が発見され、この南原第1号古墳は、6世紀末から7世紀初頭に位置づけられた。

中世の溝状遺構の発見 荒川の旧堤外にあたるこの南原遺跡を含む一帯は、鎌倉から室町時代にかけて、大きな屋敷地(伝桃井屋敷)であったと伝えられている地域である。今回発見された溝状遺構は、溝内から中世所産と考えられる陶器片が出土しており、ここに、この時代の建物を伴う、なんらかの遺構があるものと考えられた。(塩野 博)

3 第2・3次発掘調査の経過

第2次調査は、A地区で、第1次調査の成果に基づき、1次調査の南側と、かつて、倉庫建設の際に土師器の発見されたB地区の発掘調査を併行して実施した。

A地区の調査は、第1次調査によって表土の状態が判明しているため、機械力を利用して表土を取り除き、近接する人家・工場・市道との安全距離をとり、 $20 \times 25m$ の調査区を設定した。発掘調査は、調査区全体を地盤である黄褐色粘土層まで掘り下げ、遺構の存在を確認したうえで、竪穴住居跡、方形周溝墓、そして最後に古墳の周堀の精査を実施した。

B地区の調査は、倉庫および資材置場にはさまれた狭い空地内の調査であったため、 $10 \times 10m$ の調査区しか設定できなかった。しかしながら、遺構の状態から可能なかぎり拡張した。調査は、遺構の全体をつかんだうえで、まずピット群、竪穴住居跡、そして方形周溝墓の順に進めた。

第3次調査は、D地区およびE地区にかかるものである。D地区は、荒川左岸公共下水道工事の工事事務所兼作業場および資材置場となるために、年度末ではあるが、急ぎで発掘調査を実施したものである。なお、工事事務所兼作業場建設地については、これより先、試掘調査を行なった結果、地盤である黄褐色粘土層はなく、埋蔵文化財包蔵地ではないと判断されたため、資材置場予定地の発掘調査を実施した。調査は、トレンチ3本を設定して行ない、竪穴住居跡、方形周溝墓の一部および土壌群を発見した。

E地区は、D地区の北側に位置するもので、宅地化が予想されるため、D地区の調査完了をまって発掘調査を実施したものである。この地区もトレンチを設定して発掘を実施したが、ピットがどのトレンチからも発見されるにおよび、トレンチの完掘後、それらの間の表土を除去し、 $15 \times 8.50m$ の調査区を全掘し、ピット群の現出につとめた。

この第2次・第3次調査には、国学院大学考古学会および東洋大学考古学研究会の有志の諸君をはじめ、県立蕨高等学校・同戸田高等学校・同浦和第一女子高等学校の郷土研究会の諸君、それに市民の方々が参加された。

(伊藤 和彦)



第2図 発掘調査風景(第2次)



第3図 発掘調査風景(第3次)

II 南原遺跡A地区の発掘調査 (第2次)

1 A地区の遺構概観 (第4図)

昭和44年度の第1次発掘調査区では、前述のごとく、方形周溝墓(南原第1号方形周溝墓)1基、円墳周堀(南原第1号古墳の周堀一部)、中世の溝状遺構を発見した。

昭和45年度の第2次調査は、この第1次調査区の南に20m×25mの調査区を設け、グリット方式により調査区内全面を発掘した。

その結果、第1次調査で確認した円墳周堀の一部を調査区北側で発見した。また新たに、竪穴住居跡を調査区中央部で南北一列に3基と、調査区西辺にかかって1基の合計4基。さらに調査区中央部に3基と第1号古墳の周堀内側に1基の方形周溝墓。それに、調査区東辺にかかって、円形周溝墓を発見した。

20m×25mという狭い調査区内で、以上のごとく10基の遺構を発見したが、これらのいくつかの遺構は、互いに、下表のような関係で、新旧の別を見分けることができた。

A地区遺構の切合関係一覧表 (○ 切っている ● 切られている)

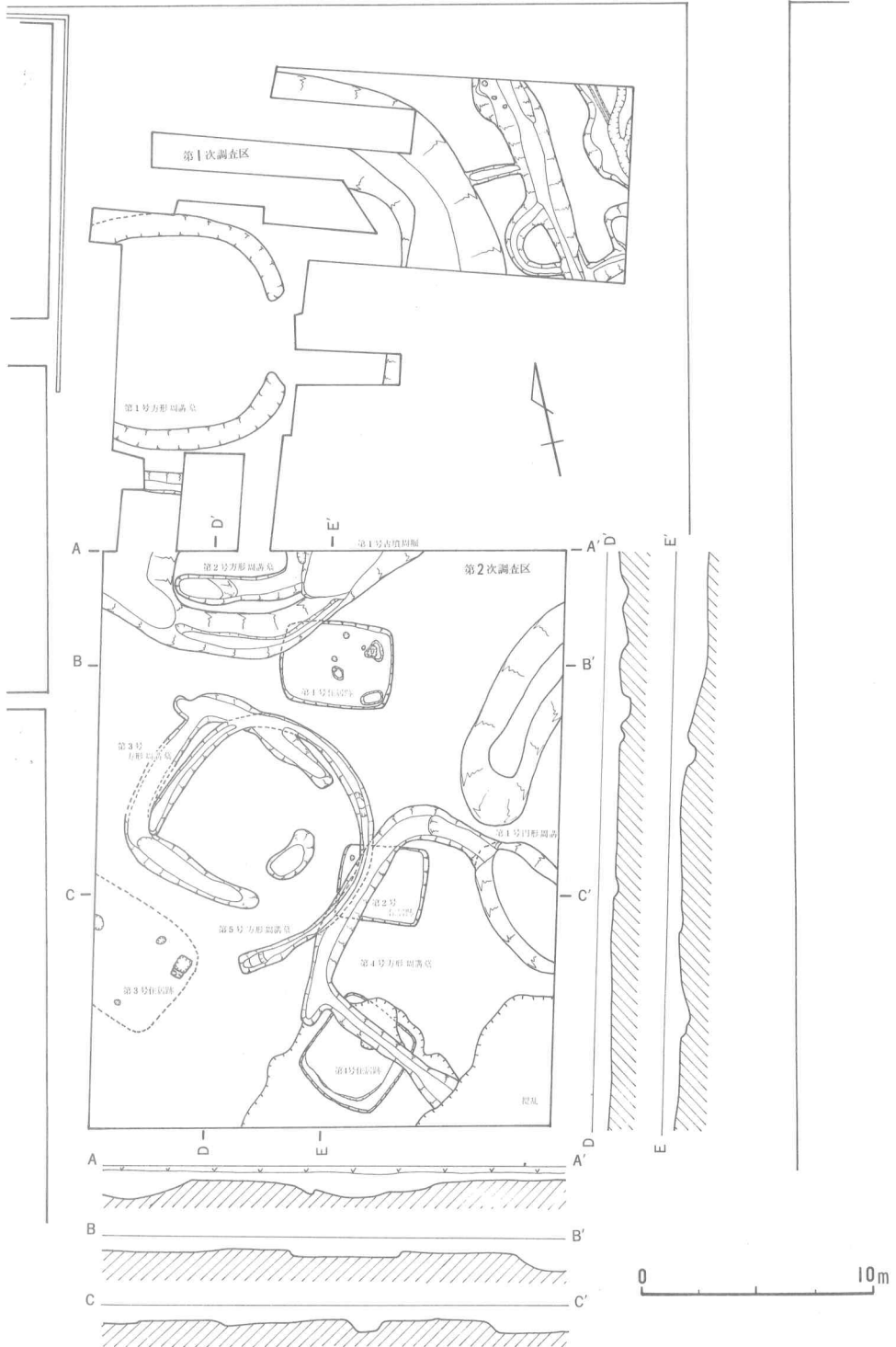
関係遺構 各遺構	住居跡				方形周溝墓				古墳	
	第1号	第2号	第3号	第4号	第2号	第3号	第4号	第5号	第1号	1円周
第1号住居跡									●	
第2号住居跡							●	●		
第3号住居跡										
第4号住居跡							●			
第2号方形周溝墓									●	
第3号方形周溝墓								●		
第4号方形周溝墓		○								
第5号方形周溝墓		○				○	○			
第1号古墳	○				○					
第1号円形周溝墓							○			

2 A地区の遺構各説

南原第1号住居跡 [図版一の2] (第5図)

北コーナーを南原第1号古墳の周堀によって切られているが、3コーナーを確認し、その規模、形態共にほぼ明らかにすることができた。

東西4.70m、南北3.70mの隅丸方形のプランを呈す。壁高は10cm前後で浅く、壁溝はない。柱穴は、明確なものがなく、中央から東寄りに6か所のピットが発見されたが、これらには、規則性がない。このピットのうち、南コーナーに平面楕円を呈する深さ約10cm、平底のピットがあるが、これは、おそらく預蔵穴と考えられる。



第4図 南原A地区遺構全測図

なお、この住居跡の床面には、4か所の焼土がある。このうち、両コーナー周辺には、かなり広範囲に焼土がみられ、炭化材が残存していた。

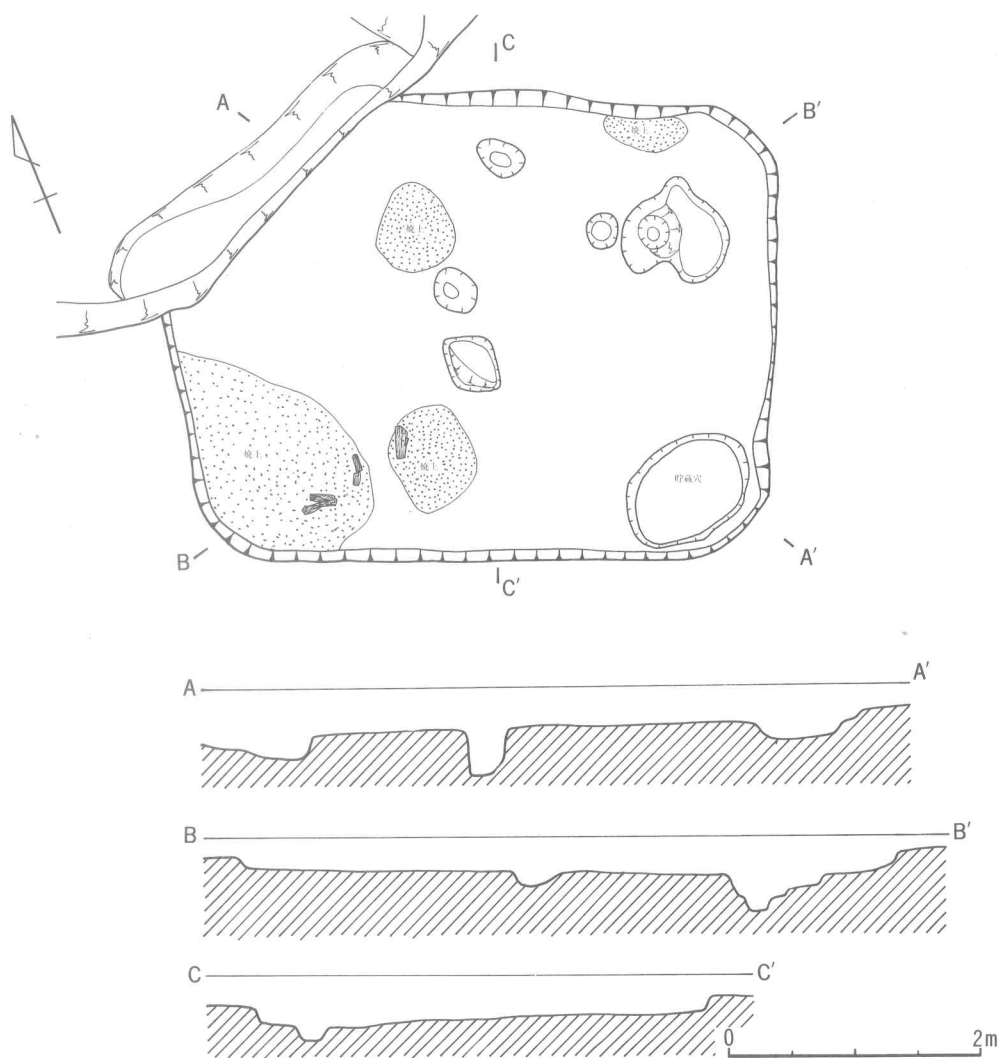
出土遺物は、皆無であった。

南原第2号住居跡〔図版二の1〕（第4図）

東西4m、南北3.30m、隅丸方形プランを呈す小規模な竪穴である。

この住居跡は、南原第4号・5号方形周溝墓に切られており、完全な形態では残存していない。床面は、堅緻であり、壁高は10~20cm、壁溝はない。柱穴は詳細に探査したが、北コーナー付近に1か所発見されたのみである。

出土遺物は、器台形土器が一個出土した。



第5図 南原第1号住居跡実測図

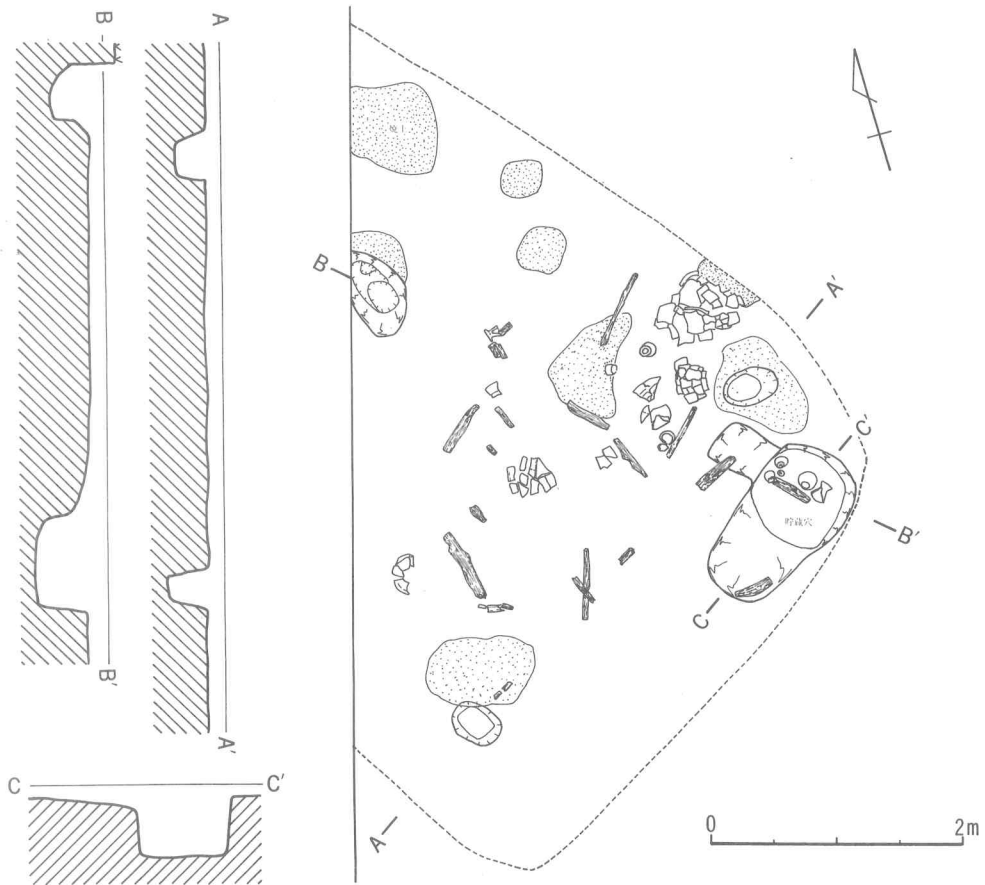
南原第3号住居跡 [図版二の2] (第6図)

四方の壁が発見できず、貯蔵穴、柱穴、焼土と土器の散布状態から推定した住居跡である。すなわち、住居跡内には、多量の焼化材が散乱しており、また、その東側には、焼土のブロックが発見された。これらの炭化材と焼土の間や、焼土の中から、つぶれた状態で土器が発見された。柱穴は、発見し難かったが、遺物等を取りあげた後に詳細に探査した結果、焼土の下から、かろうじて発見することができた。貯蔵穴は、住居跡東コーナーと推定される位置に良好な状態で発見することができた。この貯蔵穴の形態は、一辺70cmの平面隅丸方形を呈し、垂直に掘りこまれている。深さは床面から40cmで、平底である。

なお、推定できた住居跡の大きさは、東西4.50m、南北5.50m以上の隅丸方形である。

床面の遺物出土状態は、まず壺形土器1個が立った状態で発見され、これを中心にして、その周辺には、大形の甕形土器等がつぶれた状態で発見された [図版三の1]。

また、貯蔵穴の底からは、台付甕形土器の脚部、壺形土器、手づくねの小形土器や、焼石および炭化材が出土した [図版三の2]。



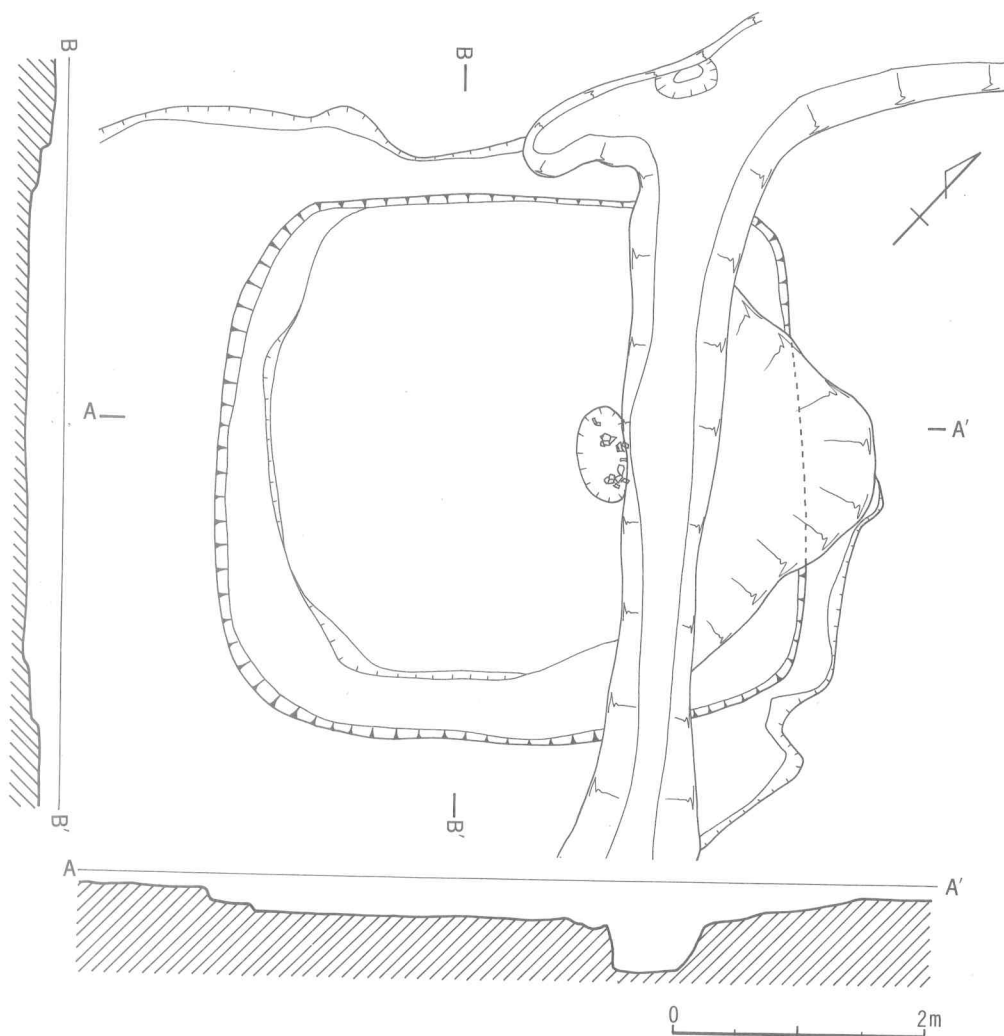
第6図 南原第3号住居跡実測図

南原第4号住居跡 [図版四の1・2] (第7図)

北壁と南壁の一部を南原第4号方形周溝墓南溝に切られ、さらに、東壁の中央が攪乱されている。住居跡の規模は、東西4.70m、南北4.40mで、プランは隅丸方形であるが、西壁および南壁に若干膨みが見られる。また、住居跡内には、西側と南側に床面からの高さ約10cmのテラスを有している。

壁高は、西・南壁でテラス上から約10cm、東および北壁は、壁が攪乱のため削られており床面から約10cmと現状では低くなっている。

出土遺物は、床面中央より若干東寄りに楕円形のピット（このピットの東側一部は、第4号方形周溝墓で切られている）があり、この中から、土器片が出土した。なお、遺物は、このピット以外の床面やテラス上からは出土していない。



第7図 南原第4号住居跡実測図

南原第2号方形周溝墓 (第4図)

南溝のみ発見されたものである。この周溝は、南原第1号古墳の周堀で、南コーナー外側が切断されている。また、この溝は、西側が深くなり立ちあがっている。したがって、平面プランは「コ」の字形を呈するものと思われる。溝の幅は、平均1.30mである。

南原第3号方形周溝墓 [図版五の1・2] (第8図)

南原第5号方形周溝墓に、東溝と北溝方台部側を切られ、さらに北溝は浅い攪乱にあっていて、平面形態は、内外コーナーとも若干丸味を呈しており、東・北・西の3溝は連続しているが、南溝は、切りはなれている。しかも、東と西溝からの距離を等しくしておらず、西溝の先端に近づいて掘られている。また、東溝は、長さ50cm、幅は50cmと北溝から突き出ている。

規模は、南北8m、東西7.80mである。周溝の幅は、北溝1m、東溝1m、西溝1m、南溝1.10mでほぼ平均した幅である。周溝の掘り方は、方台部側をほぼ垂直に掘り、外側は、かなり傾斜をもっている。溝底は、北溝と南溝が平らであるが、東溝は中央付近まで、北溝と同じ深さを保ち平らであるが、先端に向かって漸次浅くなっている。西溝はコーナー付近に長径2.20mのすり鉢底形を呈す掘りこみがある。

周溝内に堆積した土層は、最下層にローム粒子を含んだ黒褐色土、その上にローム粒子を含んだ黒褐色土、その上にロームでロックを多量に含んだ褐色土が堆積している。

出土遺物は、南溝から甕形土器が出土しているほか、他の溝からは、土師器片が若干出土したのみである。

南原第4号方形周溝墓 [図版六の1] (第8図)

第4号方形周溝墓は、南原第2号・4号住居跡を切って造られているが、北溝を南原第5号方形周溝墓に切られている。さらに、南コーナーに近い部分が攪乱されている。

平面形態は、第3号の方形周溝墓と同じように、内外コーナーとも丸味を呈している。また北溝は、両溝と連続するコーナー部で、長さ80cm、幅70cmほど突き出しがある。

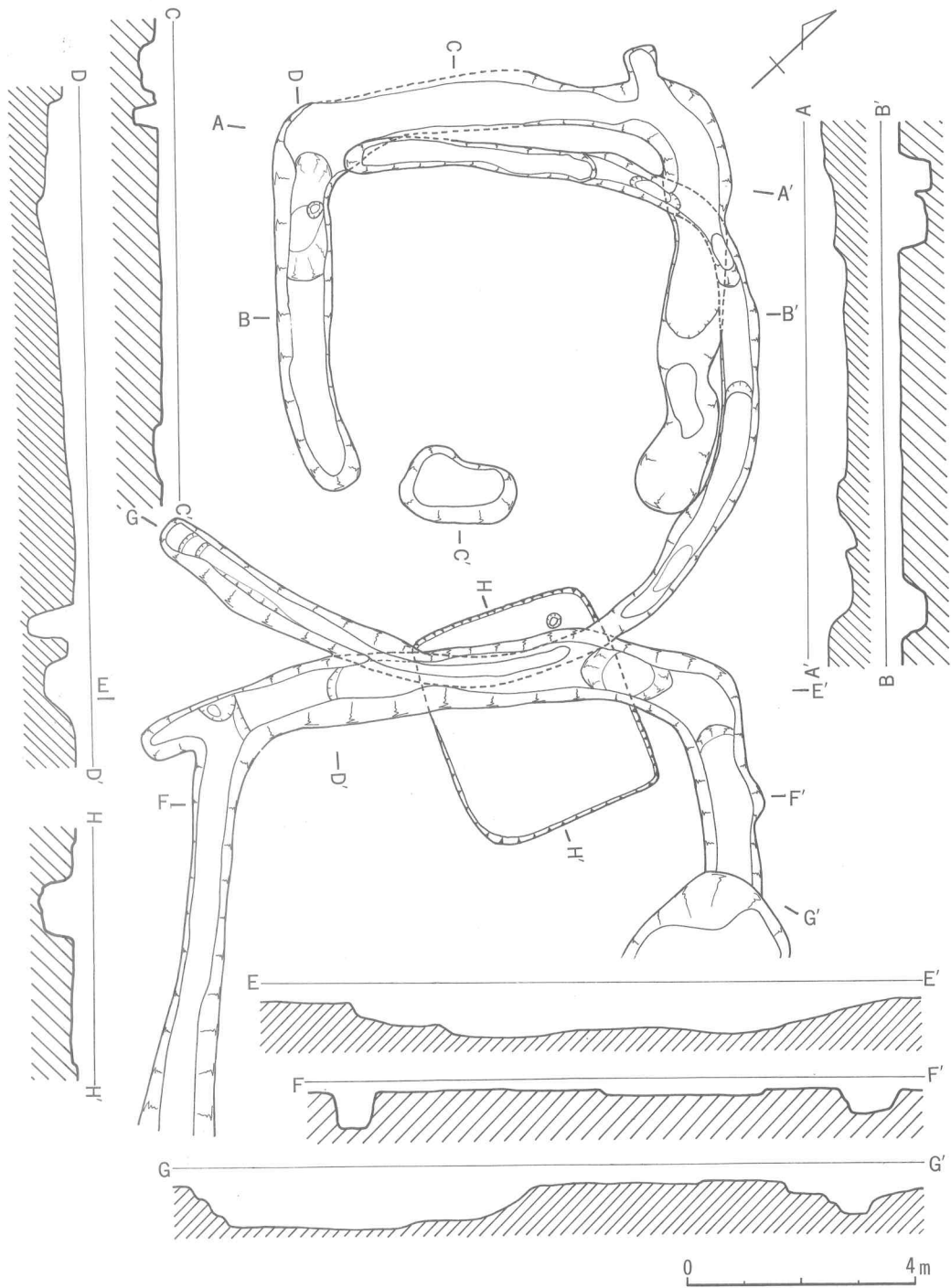
規模は、東西10m、南北は不明である。周溝の幅は、北溝1.10m、東溝1m、西溝0.70mで、西溝が、他の溝に比較して若干狭い。周溝の掘り方は、内外ともかなり傾斜をもって掘られている。溝底は、それぞれコーナー部が浅く、中央部が深くなっており、いわゆる舟底形を呈している。また、北溝には、長径約1.70m、深さ20cmの掘りこみがある。

溝内に堆積した土層は、土壌状の深い部分で、最下層に、粘性の強い黒褐色土がうすく積もり、その上方台部から流れこんだローム粒子を多量に含んだ褐色土が厚く堆積している。

出土遺物は、皆無であった。

南原第5号方形周溝墓 [図版六の2] (第8図)

南原第5号方形周溝墓は、南原第3・4号方形周溝墓を切って造られている。平面形態は、方形の



第8图 南原第3·4·5号方形周沟墓实测图

概念からかなりはずれるもので、方形、およびそれに近い形で曲るコーナーはなく、全体プランは、円形を想像させるが、西溝はなく、いわゆる馬蹄形を呈するものである。特に東溝の外周は、 $R=12m$ のカーブを有している。しかしながら、東溝から続く北溝と南溝には直線部分が観取される。

規模は、南北 $9.50m$ 、周溝の深さは他の3基より深く、幅も狭く、平均 $70\sim 80cm$ である。溝底は、それぞれの溝に土壇状の深みがある。すなわち、北溝では中央部、南溝は溝の先端から階段状に深まり、北溝と継がる部分であがっている。さらに北溝では、東溝とのコーナー部分に1か所、それに先端から中央部にかけて一段と深くなっている。

溝内の堆積土は、最下層に外側からわずかにローム粒子を含む粘性の黒褐色土が流入し、その上に方台部側から、ローム粒子を多量に含む粘性の強い褐色土が積り、その上に、ロームブロックが混入した黒褐色土が重なっている。出土遺物は、皆無であった。

南原第1号古墳周堀 [図版七の1]

(第4図)

調査区の北西隅に検出されたもので、第1次調査区でも発見され、人物埴輪頭部や円筒埴輪等が出土した周堀の南部分である。

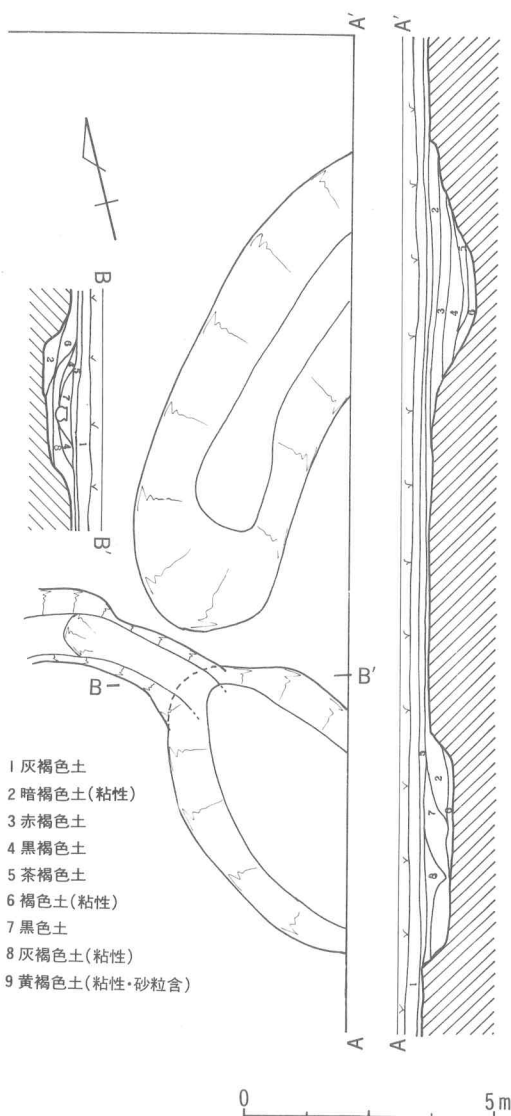
周堀の形態は、馬蹄形を呈するもので、今回発見した部分は、いわゆる周堀の開口部である。この部分から東側と西側が漸次深くなっている。第1次調査では、西側(西堀)の深くなった部分で人物埴輪頭部が出土した。なお、今回の調査範囲では、出土遺物はない。

南原第1号円形周溝墓 [図版七の2]

(第9図)

西向きに開口した、いわゆる馬蹄形を呈する周溝である。溝の上幅は約 $3.20m$ 、平底で幅 $1.50m$ 、深さは、開口部に近くなるにつれて漸次浅くなるが、北側溝でローム面から $70cm$ である。周溝内の堆積状態は、第9図の断面のごとくである。出土遺物は、北・南側堀とも開口部に近いところで、それぞれ1個の甕形土器が出土した。

(塩野 博)

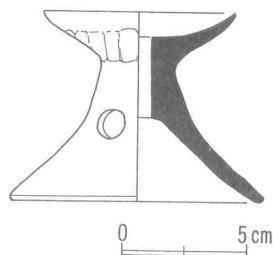


第9図 南原第1号円形周溝墓実測図

3 A地区の出土遺物各説

南原第2号住居跡出土遺物 (第10図)

第2号住居跡から発見された遺物は、器台形土器1個である。この器台形土器は、器受部が浅くでき、坏部の中心から脚部に垂直な孔を有している。脚部は大きくラップ状に開き、四孔を有している。器面はへらで整形されているが、坏部内側は、櫛目による整形である。高さ7.50cm



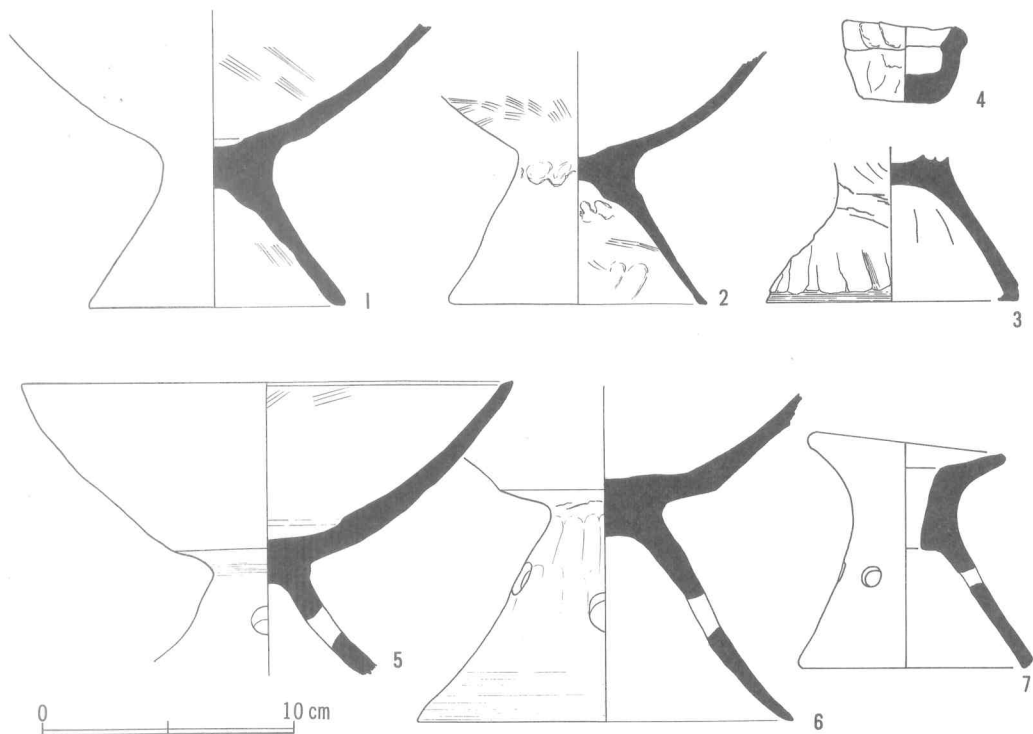
第10図 南原第2号住居跡出土土器実測図

南原第3号住居跡出土遺物 (第11・12図)

壺形土器 (第12図1~4) 1は、口縁部を欠失している。胴部は、球形状を呈す大型の壺形土器である。文様は、肩部に網目状交叉絡縄文と、その下に3行のS字状結節文が施文されている。底部は平底で木葉痕が付いている。

器面の整形は、胴部の上部をへらの横削り、下部を縦削りし、その上に、縦方向のへら磨が行なわれている。

また、肩部文様下から底部にかけて、赤彩が認められる。



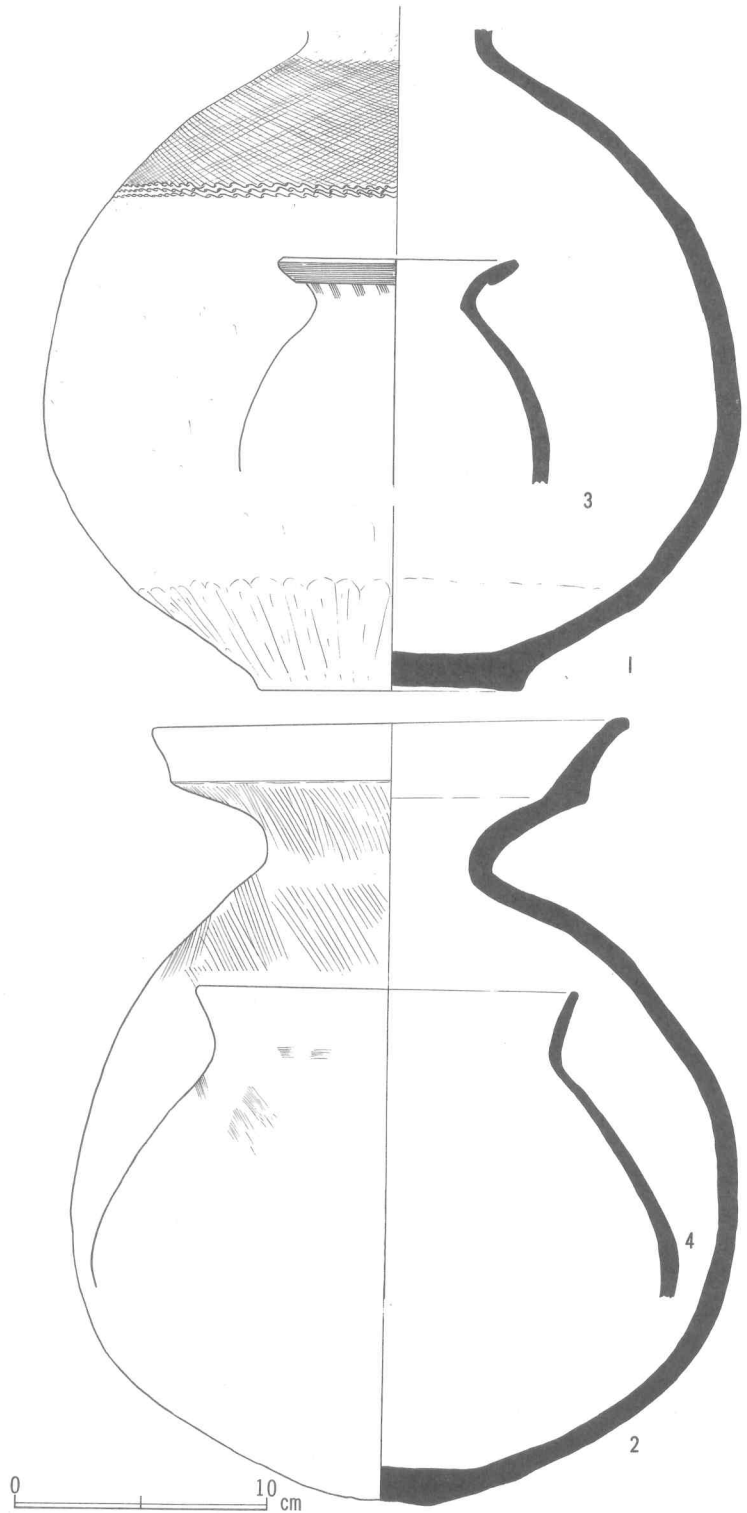
第11図 南原第3号住居跡出土土器実測図

2は、「く」の字状に外反する口縁部に複合口辺を有し、肩部がなだらかに落ち、胴部最大径を下半に有する、やや長めの球形状を呈する胴部であるが、底部は、小さく、やや不安定な土器である。

器面の整形は、口縁部および肩部に刷毛目痕を有しているが、胴部以下は風化しており整形手法は不明である。高さ30.5cm、口径19cm。

3は、底部を欠失している複合口辺を有する壺形土器である。口縁部は大きく外反し、頸部は「く」の字状に折れ、肩は張らず胴部へ移行している。胴部は最大径が中央にあり全体的に丸味もっている。胴部の整形は、ヘラで縦に削っている。また内部は、横ナデである。色調は暗褐色を呈するが、胴部に朱が塗られている。

4は、胴部最大径を下位にもつ壺形土器で底部を欠失している。整形は一部に刷毛目痕が残っているが、器面



第12図 南原第3号住居跡出土土器実測図

が風化して、全体的な整形手法は不明である。なお、胎土は、細かな砂を含んでいるが、きわめて良好である。色調は、黒褐色を呈す。

台付甕形土器（第11図1～3） 1・2はともに直線的に開く脚部である。2は、甕部と脚部の接合部分がはっきり認められる。

器面の整形は、内外とも刷毛を用いているが特に2の内面には、指頭による圧痕が残っている。3は、ヘラ削りによる整形で、その圧痕が明瞭に残っている。色調は、三点とも暗褐色である。

手捏土器（第11図4） 臼状の手捏土器で、口縁部は短く外傾し、指頭圧痕が著るしい。胴から底部にかけては、多少指頭圧による凹凸があるが滑らかである。色調は黄褐色を呈している。

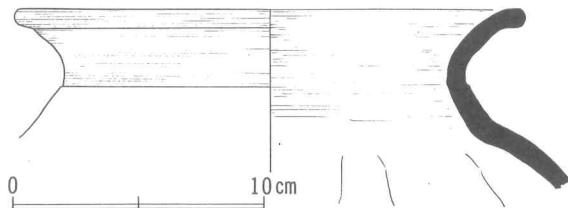
器台形土器（第11図7） 器受部が浅いもので、中央に垂直に孔を有する。脚部は、直線的に開くもので、一列に5孔を有する。焼成はあまく、焼成不十分な部分もみられる。器面は風化しており、整形方法を知ることができない。

高坏形土器（第11図5・6） 5は、脚の裾部を欠失している。坏部は、やや内彎しながら斜上方に延びている。大きく開く脚部には3孔を有している。坏部口径19.5cm，坏部深さ6.20cmである。

6は、坏部の口縁部を欠失している。脚部には、二段に分かれて、それぞれ3孔ずつ計6孔が穿けられている。脚部の器面整形は、ヘラの縦削りと横ナデの整形痕らしきものが認められる。

南原第4号住居跡出土遺物（第13図）

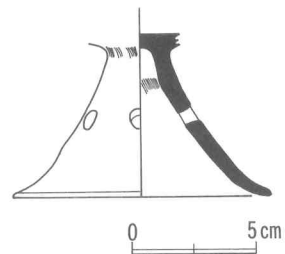
第4号住居跡ピット内から発見された土師器で、甕形土器口縁部である。口縁の形態は、大きく外反するものである。口径は20.5cmで大型の甕形土器であろう。なお、整形は内外とも横ナデである。色調は、暗褐色である。



第13図 南原第4号住居跡出土土器実測図

南原第3号方形周溝墓出土遺物（第14図）

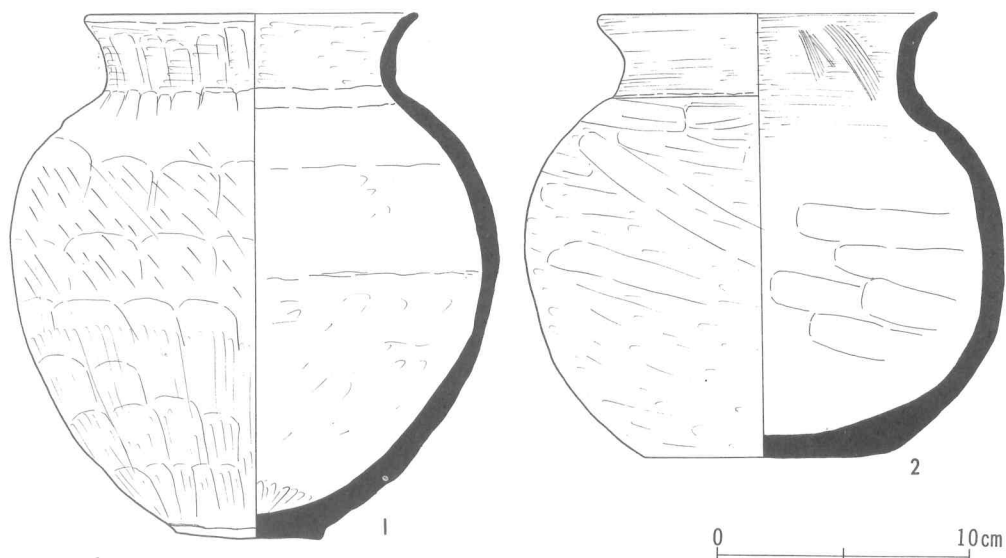
高坏形土器（第14図） 坏部を欠失し脚部のみである。この脚部はラップ状に大きく開き、ほぼ中央に5孔を有している。色調は暗褐色を呈している。



第14図 南原第3号方形周溝墓出土土器実測図

南原第1号円形周溝墓出土遺物（第15図）

甕形土器（第15図1・2） 1は、北側周溝から発見された土器である。胴部は、やや長めの球形形状をなす。口径よりも大きい最大径は、中ほどに位置する。口縁部は、頸部がやや直立気味であり、口唇部が外反する。また、口唇部は緩い稜を有している。器面整形



第15図 南原第1号円形周溝墓出土土器実測図

は、ヘラ削りである。色調は赤褐色で、胎土には砂が多量に含まれている。底部付近には、二次的に火を受けたため煤が付着している。高さ20.5cm、口径13cm、底径6cm。

2は、南側周溝から出土した甕形土器である。胴部は球形状をなす。底部径と口径がほぼ同じ大きさで、胴部最大径が中央に位置するため、全体に丸い感じのする土器である。口縁部は、頸が直立し、口唇部で大きく外反する。

器面の整形は、ヘラ削りと刷毛による。胴部は、幅約1.30cmのヘラで縦に削ったあと、横ナデが行なわれている。また、口縁部は、刷毛による仕上げである。器内部は、胴部をヘラによる横削り、口縁部は、刷毛による仕上げが行なわれている。

色調は淡茶褐色である。高さ17.5cm、口径13cm、底径10cm。

(伊藤 和彦)

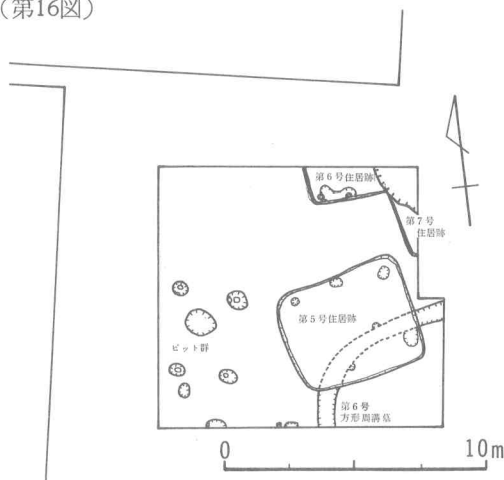
Ⅲ 南原遺跡B地区の発掘調査 (第2次)

1 B地区の遺構概観 (第16図)

B地区は、四方を倉庫にかこまれた狭い地域である。したがって、調査区域も限られており、今回の調査では、 $10 \times 10m$ を調査区として、とりあえず遺構を確認して、遺跡の広がりを握む資料を得ることに主力をおいた。

調査の結果、3基の竪穴住居跡と1基の方形周溝墓の一部分、それに不規則なピット群を発見した。しかしながら、地主の了解が得られず、当初の調査区を大きく拡張して遺構を十分追求できなかったことは遺憾であった。

(塩野 博)



第16図 南原地区遺構全測図

2 B地区の遺構各説

南原第5号住居跡 [図版八の1] (第17図)

東西 $5m$ 、南北 $4.30m$ 、隅丸方形プランの竪穴である。壁高は $10 \sim 20cm$ であり、壁溝は存在しない。床面はかたく踏みつけられており、南コーナー付近には、多量の焼土が存在していた。また、北壁下には炭化材が発見された。柱穴は、北と西のコーナー付近に2か所確認することができたが、他のピットは不規則に存在して、柱穴と断定することは不可能であった。また、北壁中央部で壁に接して $55cm \times 55cm$ の平面円形を呈するピットがある。このピットの中から、台付甕形土器と高環の脚部が出土しており貯蔵穴と思われる。[図版九の1]。

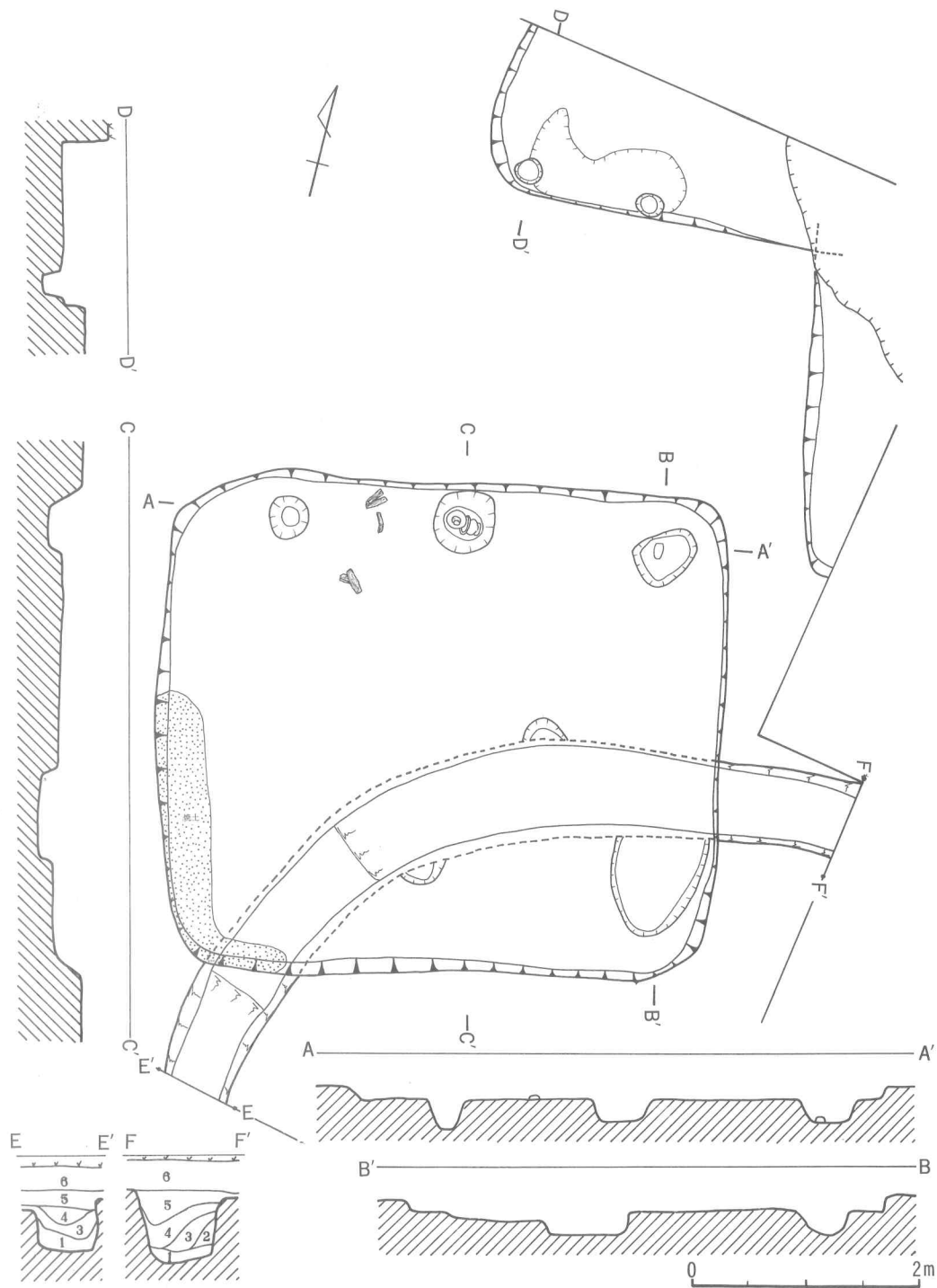
なお、本住居跡床面からの出土遺物は、きわめて少なかった。

南原第6号住居跡 (第17図)

調査区内北東隅に、西壁および南壁の一部と南コーナーが発見されたが、東側に攪乱があり、コーナーは発見できなかった。しかも、調査区が拡張できず、全体プランを現出できなかったのは遺憾である。

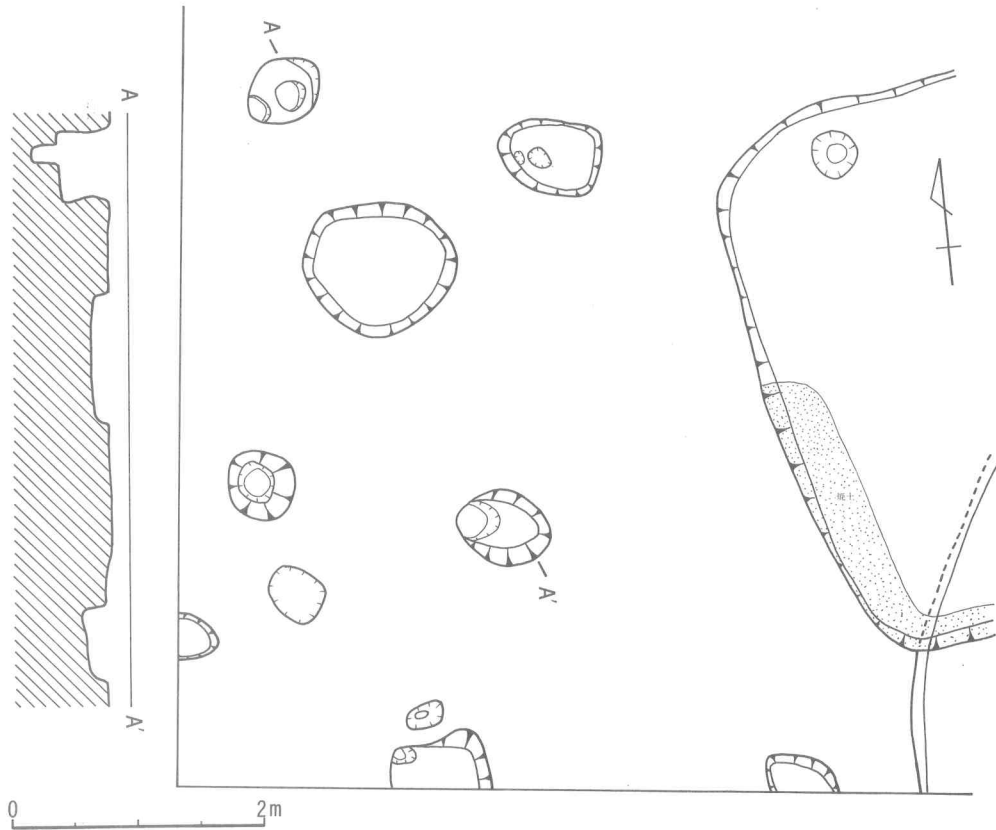
壁高は $10 \sim 15cm$ と低く、壁溝はない。床面は軟弱である。ピットは、南コーナーに1個、南壁下に1個発見された。また、これらのピットの間には不整形な窪みがある。

出土遺物は、覆土中から高環形土器が発見された [図版九の2]。



第17图 南原第5·6·7号住居跡，南原第6号方形周溝墓実測図

1. 茶褐色土 2. 黑褐色土 3. 茶褐色土 4. 黄褐色土 5. 茶褐色土 6. 表土



第18図 南原地区ピット群実測図

南原第7号住居跡 (第17図)

南原第6号住居跡と同じように、調査区の北東隅に、南コーナーと西側壁の一部が発見されたが、全体プランを現出できなかった。

南原第6号方形周溝墓 [図版八の2] (第17図)

南原第6号住居跡の下に造られていたものである。調査区の関係上、北溝と西溝の一部を調査した。この方形周溝墓は、周溝コーナーのカーブが大きな円弧を描き、方形がくずれている。周溝の幅は、コーナー部が広く、漸次細くなっており、西溝で幅65cm、深さ50cm、北溝で幅70cm、深さ55cmである。周溝の断面は、内外側とも、するどい角度で掘られている。周溝の底は、西コーナーの付近が高く、各溝中央に向かって深くなっている。また周溝内の堆積土は、最下層(1)に黄褐色粘土粒子を多量に含んだ茶褐色土が積り、この上に、方台部から流れこんだ状態を呈して、黄色粒子を含んだ黒褐色土(2)、黄褐色粘土のブロックを少量含んだ粘性の弱い茶褐色土(3)、黄褐色粘土を少量含んだ赤褐色土(4)そして、最後に炭化物を含んだ茶褐色土(5)が堆積している。

なお、周溝内からの出土遺物は、きわめて少なく、土師器の細片が若干出土したのみで、時期を明確に示す遺物はなかった。しかしながら、南原第5号住居跡よりも古いことは明らかである。

ピット群 (第18図)

ピットは、調査区の南西隅に10個発見された。これらのピットは、形態も、深さも、さまざまで、規則性は観取されないが、広範囲の調査を実施すれば、あるいは、ある一定の規則性を把握できるものと思われる。

ピット内からの出土遺物はないが、これらのピット群の北側、遺構が検出されなかった部分で、土師器や須恵器の細片が出土しており、これらの遺物と、このピット群が何らかの関連をもつものと推察できる。(塩野 博)

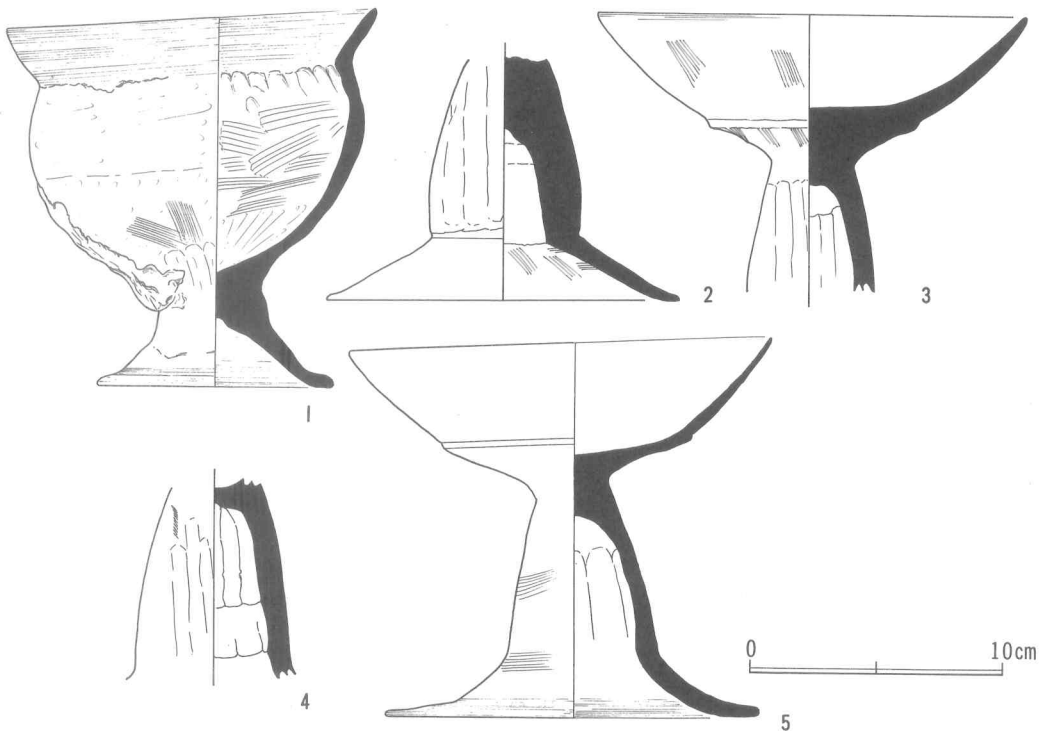
3 B地区出土遺物各説

南原第5号住居跡出土遺物 (第19図1~3)

小型台付甕形土器 (第19図1) 貯蔵穴と考えられるピットから出土したものである。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部はやや内彎している。胴部最大径は上部にあり、底部に移行するにつれて、つぼまっている。脚部は、ラップ状に開く低いものである。

器面の整形は、口縁部は横ナデ、胴部は刷毛削りである。また、内部は、口縁部の接合部に指圧痕が残っている。さらに内部中央は、刷毛による整形がみられ、底部はヘラ削りの跡が明瞭に残っている。脚部の整形は横ナデである。

なお、器面には、部分的に煤の付着がみられ、二次的に火を受けている。口径15cm、高さ14.5cm。



第19図 南原第5・6号住居跡出土土器実測図

高环形土器脚部（第19図2） 1の小型台付甕形土器と共に貯蔵穴様ピット内から出土したもので、高環の脚部のみである。整形はヘラ削りである。また内部は、横ナデである。

高环形土器坏部（第19図3） 床面から出土したもので、口径17cm。黄褐色を呈す。

南原第6号住居跡出土遺物（第19図4～5）

覆土中から出土した、高环形土器で4は脚部、5は大型の高环形土器である。坏部は、平底の鉢状を呈す。外形は、脚接合部近くに鈍い稜を有し、段をなす。脚柱部は太身で、中膨みし、著しく曲折して裾部を形成する。

器面は、整形手法をみわけられないほど風化している。高さ15cm、坏部径17cm。

（伊藤 和彦）

Ⅳ 南原遺跡D地区の発掘調査 (第3次)

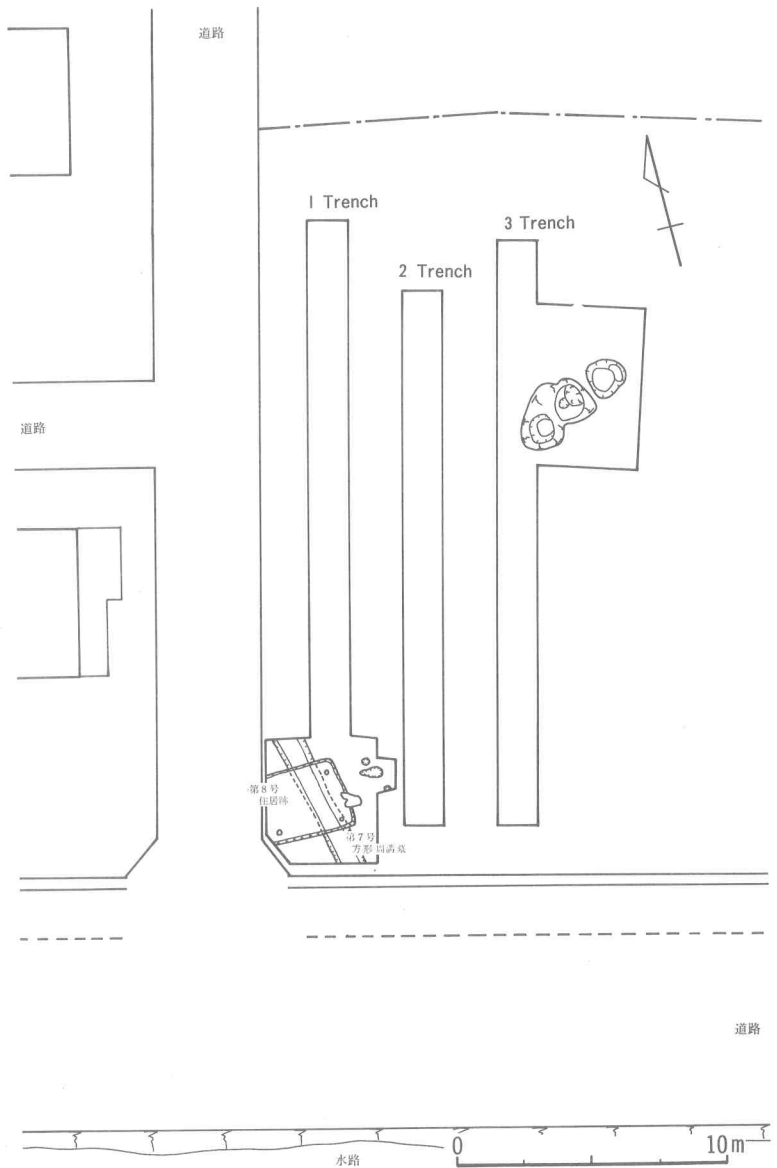
1 D地区の遺構概観 (第20図)

D地区の調査は、地区の西側に3本のトレンチを設定して調査を実施した。このトレンチは、西側から1・2・3トレンチとした。

第1トレンチは、幅1.50m、長さ22mである。このトレンチでは、南はじで、竪穴住居跡の一部を発見した(南原第8号住居跡)で、この部分を西・東・南の三方へ拡張した。その結果、住居跡の下に、上幅約1mの溝状遺構(南原第7号方形周溝墓の東溝の一部)の存在が知れた。そのほか、北側にピットを有する炉跡状遺構(精査の結果、フィゴの火口や鉄鏝を発見)を発見した。

第2トレンチでは、精査の結果、遺構の発見はなかった。

第3トレンチでは、トレンチ北寄りでは、大型のピットを発見したので、この部分を東側に拡張した結果、3基の大型ピットが検出された。このうち2基は近接して掘られている



第20図 南原地区遺構全測図

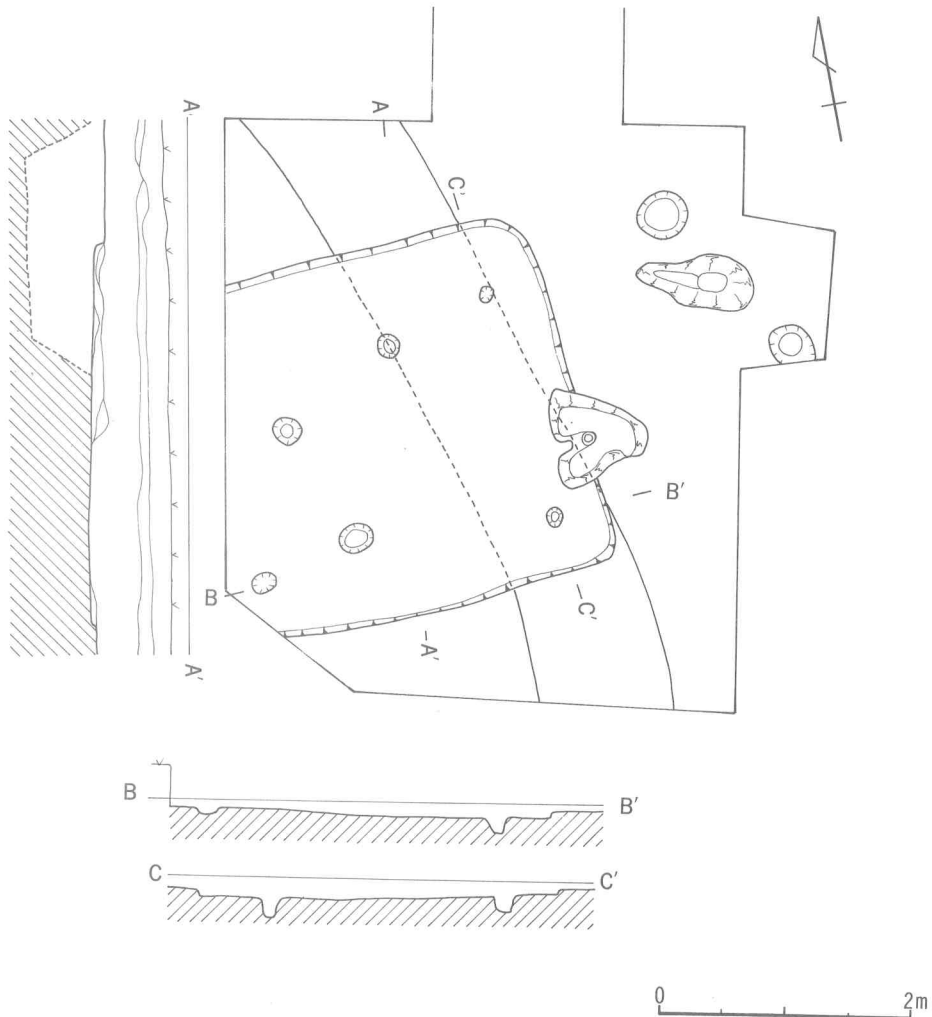
ため、切り合いが明確であった。

(塩野 博)

2 D地区の遺構各説

南原第8号住居跡 [図版十の1・2] (第21・22・23図)

一部道路の下に入るため、全プランを明らかにすることができなかった。東壁の長さは2.90mである。各コーナー寄りのピットを支柱穴と考えるならば、東西にやや長い、隅丸長方形のプランが想定できる。しかしながら、発見されたピットはいずれも貧弱なものであり、積極的にこれを肯定できるものではない。壁高は、地山を掘った部分のみが残ったためか、5cm足らずである。床面は、あまり踏みかためられておらず、炭化物と焼土の粒子の追求によっておさえることができた。ただし、炭化物も焼土も火災を考えさせるほど多くはない。なお、溝の上には薄くロームを敷いて、貼床にしてい



第21図 南原第8号住居跡実測図

た。

カマドは、東壁と床面を掘り込んで、粘土で築かれていた。保存状態が悪いため、煙道や土器をかける所は明確に現出できなかった。しかし、長期間使用されたためか、熱がカマドの袖の芯に近いところまでおよんでいた。なおこのカマドからは、住居跡同様遺物はあまり出土していない。

さらに、この南原第8号住居跡の東で、カマドが西を向いて単独に発見された。

このカマドは、砂岩質の石と粘土をもって地山を掘り込んだ上に作られている。カマドの周囲には、貯蔵穴様のピットが伴っているので、あるいは住居跡の壁がはっきりしないで、カマドのみ残ったものであろうか。

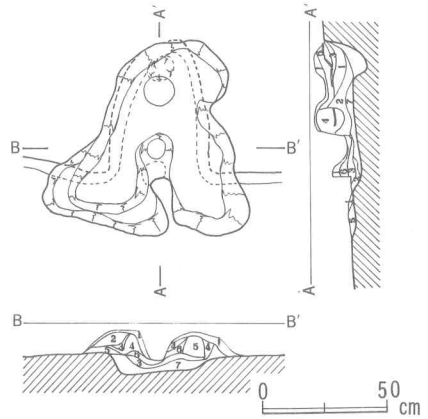
このカマドからは、断面図(第23図)に出ている坏と、甕の羽口が出土している。この遺跡では、トレンチで鉄鏝が数点発見されており、この羽口との関係は興味あるものである。

南原第7号方形周溝墓 [図版十一・十二] (第24図)

溝の一边のしかも一部分、約5.50mを発掘したのみであるが、土器の出土状態からみて、方形周溝墓であることは明らかである。東側のトレンチ(第2トレンチ)に、この溝に対応する溝が発見されていないことから、この方形周溝墓は、溝の西側が方台部に当るのであろう。また、溝の南の方は、西へカーブしており、コーナー部の近いことを示している。

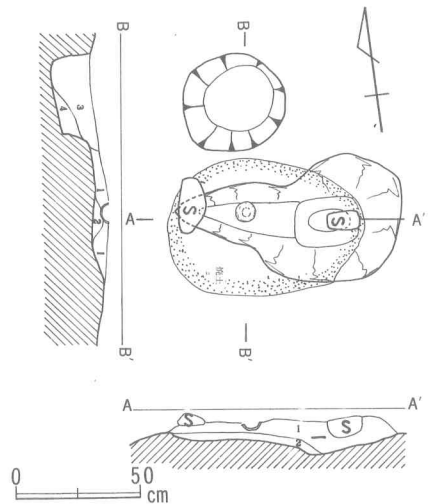
溝の断面は逆台形を呈し、状態の良いところでは、上幅1.05m、下幅0.50mを測る。溝の深さは一様ではなく、今回発掘した部分では、中央が一番浅くなっており、北側へは、段をなした後に平らに伸びている。南側では、北側のような急な段を有せず、ゆるやかに傾斜した後、水平に伸び、そして、その端にいたり段を形成している。

溝内から発見された土器は、破碎されたり、底部を欠いたりした状態で、溝底より浮いて出土している。この



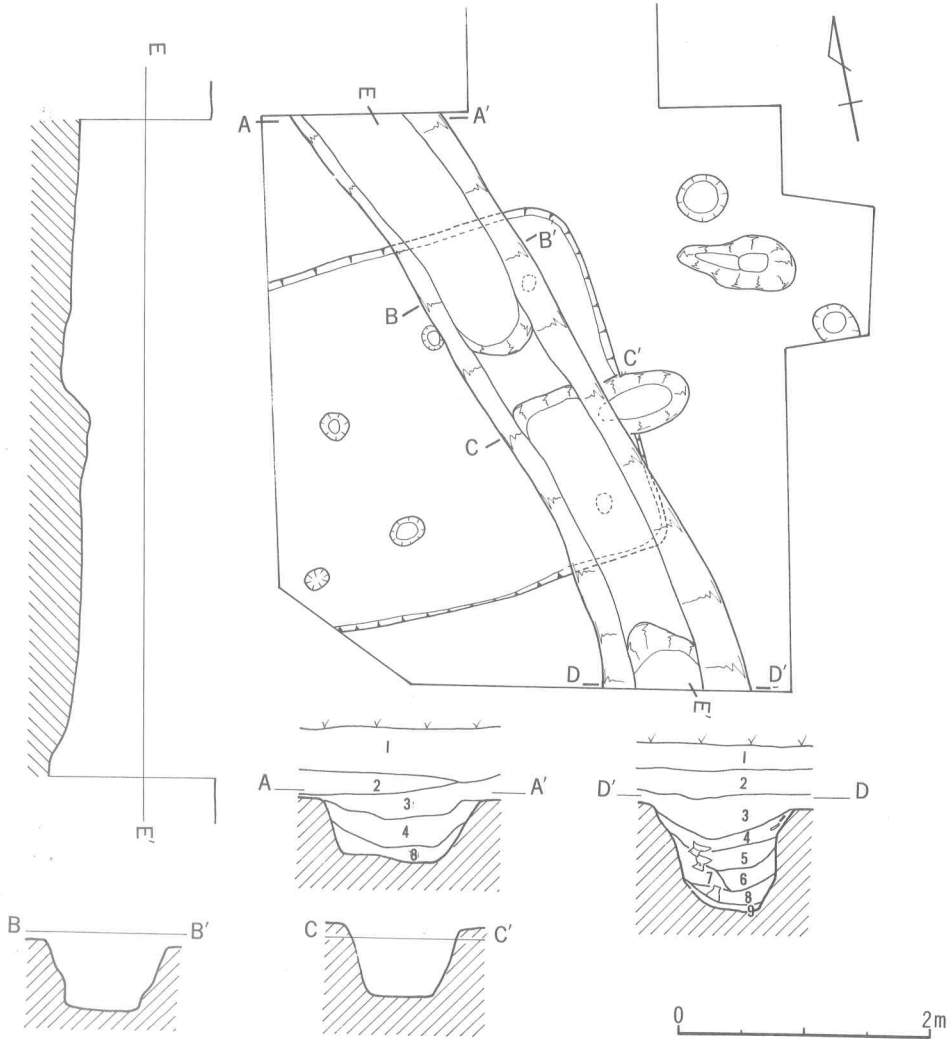
第22図 南原第8号住居跡
カマド実測図

1. 粘質を帯びた暗褐色土層を基調として若干の焼土粒子と砂粒を含む
2. 茶褐色土層に砂粒を含んだ土層で所々に焼土がみられる
3. 2層と同じであるが焼土を含まない
4. 焼土によって構成される土層
5. 暗褐色土層で黄褐色の砂粒を含む粘土層と焼土ブロックを含む
6. 5層より粘土ブロックと焼土ブロックを多く含む
7. 褐色土(黒色粒子を含む)



第23図 単独出土カマド実測図

1. やや灰色を帯びた黒褐色土層にローム粒子と焼土ブロックを含む
2. 赤褐色土層で焼けている
3. 黒褐色土層にロームと焼土粒子を含む
4. 黄褐色土層にローム粒子と大きな焼土ブロックを含む



第24図 南原第7号方形周溝墓実測図

1. 耕土。 2. 黒褐色土層。 3. 2層にローム粒子をわずかに含んだもの。 4. 3層にわずかに焼土粒子を含んだもの。 5. 焼土を多量を含む。 6. ローム粒子と焼土粒子を含む黒褐色土層。 7. 8層に比べ色がわずかに明るい。 8. ローム粒子をしもふり状に含む黒色土層。 9. ロームブロックを多量に含む黄褐色土層。

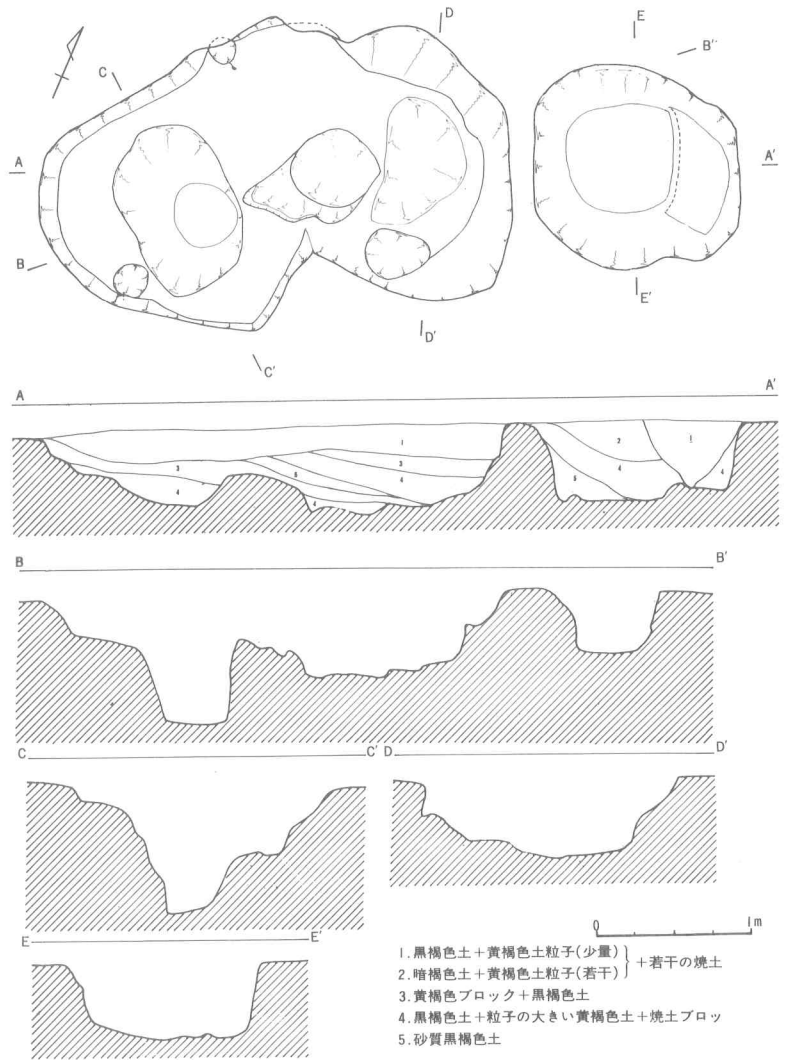
ような状態から考えると、方台部からの落下も考えられるが、しかし、周溝の南端に特に集中して発見されたことは、溝の深い部分に故意に土器を置いたと考えられよう。

周溝内の土層の堆積状態を観察すると、方台部からの土の流入が多いとばかりとは云い難い。旧入間川の氾濫のような自然的営力が加わったためであろうか。

土壌群 [図版十三] (第25図)

土壌は、平面プランを出した段階で、切り合いの新旧関係がつかめず、要領を得たセクションベル

トを残せなかった。そのうえ、土壌を埋めていた土の色が単調であり、分層が困難でもあった。そのために新旧関係がかりうじて握めたのは、東側にある円形のピット二基の関係のみである。西側の不明瞭なピットは、遺構の新旧関係はおろか、形態の推定も困難であった。しかし、土層の色調からすると、時間的な開きはあまりないようであるから、東側の土壌を参考に、その切り合いを考えてみる。まず、東側のピットのように深く、隅丸方形ないし、隅丸長方形と考えられるものが三基存在していたようである。そして更に、それらに比べると浅く平面



第25図 土壌群実測図

プランの大きいものが二基以上存在したようである。浅いプランのものは、深いものの上に貼っていたように思われたが自信が持てなかった。

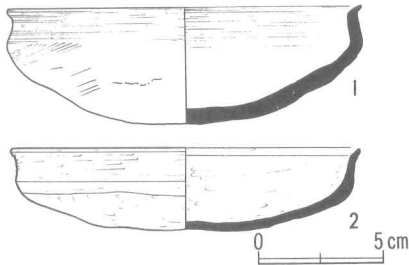
遺物は、磨滅した台付甕形土器の細片が出土したのみで、時代を決める手懸りはない。

(坂本 和俊)

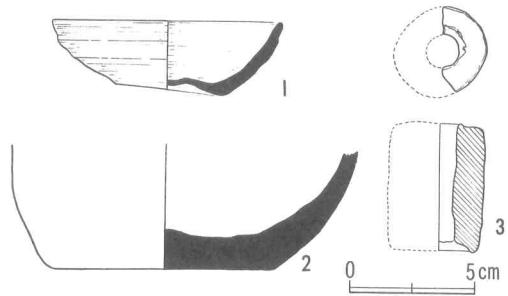
3 D地区の出土遺物各説

南原第8号住居跡出土遺物 (第26図)

第8号住居跡出土の遺物は、坏形土器2点である。1は、口縁に比して、きわめて器高が高く、丸底で、埴形土器に近い。口縁部は、刷毛による整形痕が残り、坏部はヘラで削った後に横なががみられる。



第26図 南原第8号住居跡出土
土器実測図



第27図 南原D地区単独カマド内
出土遺物実測図

なお、この坏形土器は、全面に赤彩が認められる。口径14cm、高さ4.5cm。

2は、口径14cmで、1と同じであるが、高さが3.3cmと低い。器面の整形は、口縁部がへらで横割り、坏部もへら整形ではあるが、一定の方向性はなく、粗雑な整形である。また、内面は、横向きのへら整形である。

なお、口縁部に赤彩が認められる。

南原D地区単独カマド内出土遺物 (第27図)

1は、須恵器の坏である。器形は不整形で、坏部は円形を呈さず、楕円形に近い。口径は長径9.5cm、短径8.7cm。高さは2.8cmである。

2は、土師器長甕形土器の底部である。

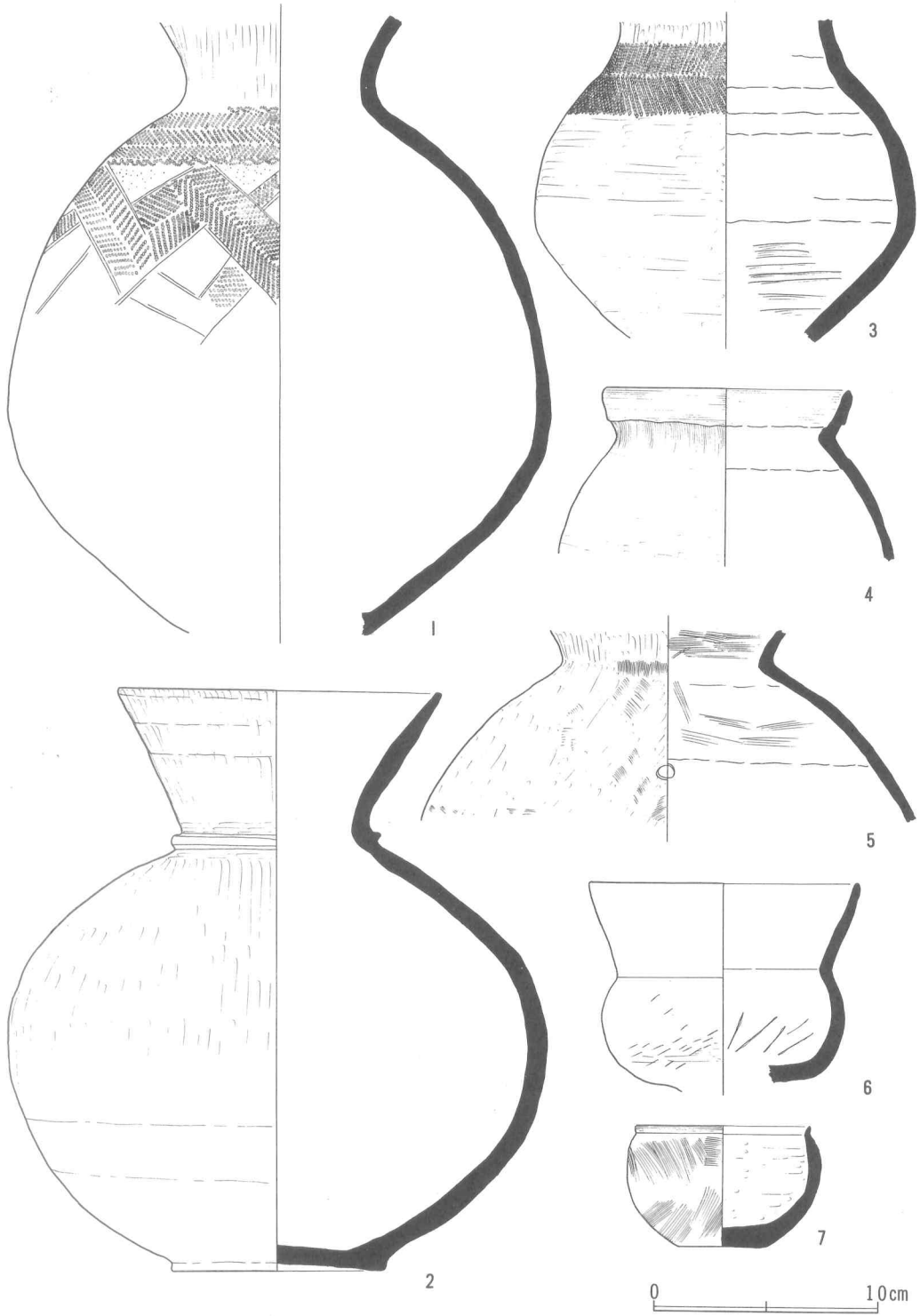
3は、鞆羽口の破片である。長さ5cm。直径3.5cm。

南原第7号方形周溝墓出土遺物 (第28・29図)

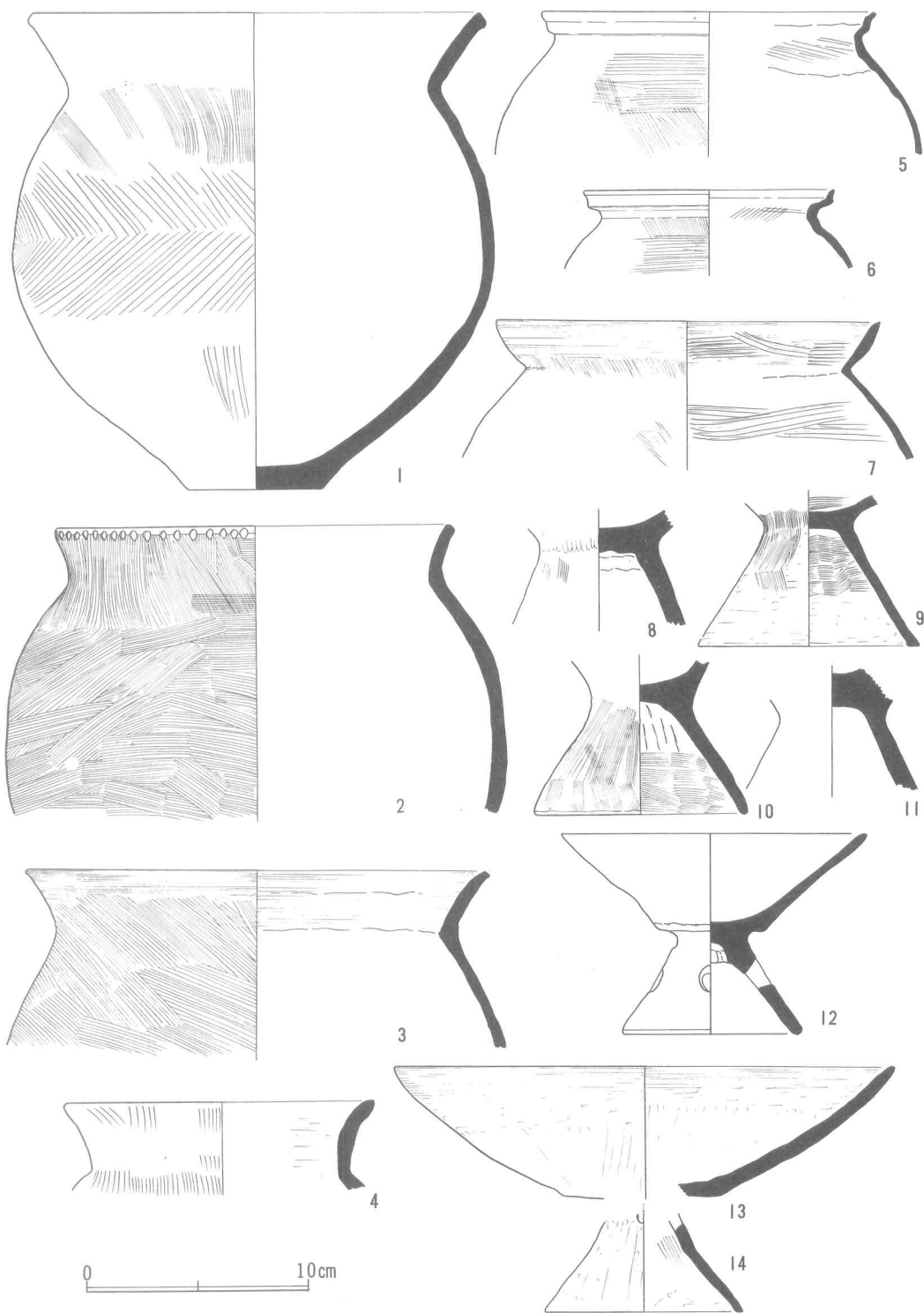
壺形土器 (第28図1～5) 1は、口縁部と底部を欠失している。頸部から胴部にかけては、緩やかなカーブを描く。胴部最大径は下半部にあり、下ふくらみする器形を呈する。肩部に細縄文が施こされ、上下端は二段のS字状結節文がこれを界している。また、胴部上半には、細縄文を地文とした鋸歯文を交叉させて、複雑な文様が施こされている。胴部下半は、へらでよく磨かれている。胎土には、非常に多くの砂粒を含み器表はザラザラしている。色調は、白褐色、内面は灰白色を呈している。なお、頸部の内外および胴部下半の外面には一面に赤色顔料が塗られている。

2は、単純に外斜する口縁を有し、頸部に梯形の断面をもった凸帯が繞らされている。胴部中央に最大径があるが、全体的にズングリしている。底部は、上げ底である。整形は全体に縦方向にへら磨きされているが、口縁部上部や胴部下半部に輪積み痕がみられる。胎土は精選され良好である。色調は赤褐色、内部は黒褐色を呈している。

3は、口縁部および底部を欠失している。胴部の最大径は下半部にあり、下ふくらみの器形を呈する。肩部に羽状を呈する細縄文が施こされている。整形は、へら磨きである。器の内部には、輪積み



第28図 南原第7号方形周溝墓出土土器実測図（その1）



第29図 南原第7号方形周溝墓出土土器実測図（その2）

の痕が明瞭に残っている。胎土は良好で、色調は黄褐色を呈している。

4は、複合口縁を有する土器で、胴部下半以下を欠失している。整形は、口縁部を横ナデ、頸部をハケナデ、肩部から胴部にかけてはヘラで横ナデされている。胎土には、小石を若干含んでいるが、焼成は、きわめて良好である。色調は淡黄褐色を呈している。

5は、口縁部および胴部下半を欠失している。頸部は「く」の字状を呈している。また、胴部上部に、直径6mmの円孔を有している。整形は、まずハケによって行ない、ついでヘラで細かく磨いている。胎土は精選されたものを使用しており、焼成も良好である。色調は灰黄色を呈している。

埴形土器（第28図6） 底部を欠失しているが、おそらく、平底を呈するものと思われる。頸部のくびれは緩やかであるが、内側に稜を作り、口縁部は、やや内彎ぎみで立っている。胴部は、ヘラで良く磨かれ平滑である。胎土に小石を若干含むが焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。

坏形土器（第28図7） 直線的に開く短い口縁を有している。胴部は丸く、底部は平底である。口縁は横ナデ、胴部はハケ、内部はヘラの横削りによる整形である。胎土は精選された良質のものであるが、焼成はあまり良くない。色調は淡黄色を呈している。

甕形土器（第29図1） 長い直線的に開く口縁部を有し、頸部は「く」の字状に折れ、胴部最大径を中央部に持つ、平底の甕形土器である。器面の整形は、肩部を細かいハケで、胴部中央は、羽状にかなり荒い鋸歯状工具を用いている。胎土には砂粒を含む。色調は淡黄褐色を呈している。

台付甕形土器（第29図2～11） 2は、短い口縁を有し、頸部は丸味をもって胴部に移っている。胴部の最大径は上部にあり、球形を呈している。口唇部には、ヘラによる左右からの刻み目が付けられている。器面は、ハケで、口縁部から肩部にかけて縦方向に、胴部は斜位及び横方向に整形されている。胎土は精選されたもので、色調は茶褐色を呈している。

3は、口縁部が大きく外反し、胴部最大径を下半部に有するものである。器面の整形は荒いハケにより、また、口縁部と口縁内部は、横ナデによる。胎土には、細かい砂粒をわずかに含んでいる。色調は黄褐色を呈している。

4は、口縁部のみであるが、他の甕形土器と異なり、口縁部が立ち上がっている。整形はハケで行ない、荒いハケ目が部分的に残っている。色調は淡黄色である。

5・6は、鋭い段を有するS字状口縁をもつ土器で、ともに器肉が非常に薄く、作りのよい土器である。整形は、縦及び横方向のハケ目が任意に施こされている。胎土は5に多量の石英、長石、小砂を含み、6にも小砂を含んでいる。色調は、5が褐色、6は黒褐色を呈している。

7は、内彎する口縁を有し、頸部は「く」の字状に鋭く折れて胴部へ移行する。口唇部内側は、鋭利なヘラで削いでいるため、口唇部先端は突っている。器肉は薄く、きわめて作りの良い土器である。口縁部は横ナデ、頸部は荒いハケで縦位に、そして胴部は、一部にハケ目を残す程度の整形である。器内部については、口縁部および胴部を小口状工具で任意に整形している。胎土は、小石を若干含んでいる。色調は黄褐色を呈している。

8～11は、台付甕形土器の台部で、ともに直線的に開くものである。8の整形は、部分的にハケ目が残っているが、縦位のヘラ削りである。9は、内外面ともハケ整形である。10も器面は縦位、内部

は横位のハケ整形。11は、明瞭ではないがヘラ整形と思われる。色調は、それぞれ、灰褐色、茶褐色、茶褐色、灰褐色を呈している。

高环形土器（第29図12～14） 12は、直線的に開く坏部に、これまた直線的に開く小さな脚部が付く、この脚部には、外部から穿孔した4個の円窓を有している。形は、ヘラにより仕上げられている。色調は、赤黄色を呈す。

13は、口径22.5cmを測る大型の坏部であるが、脚部は接合部から欠失している。整形は、口縁部付近を横ナデ、中央部をヘラの横削り、そして底部をヘラの縦削りで行なっている。色調は淡黄色であるが、全体に赤色顔料が塗られている。

14は、高坏の脚部である。ラップ状に開くもので、上部に円窓を有している。整形は、ヘラ磨きである。色調は黄褐色を呈している。（塩野 博）

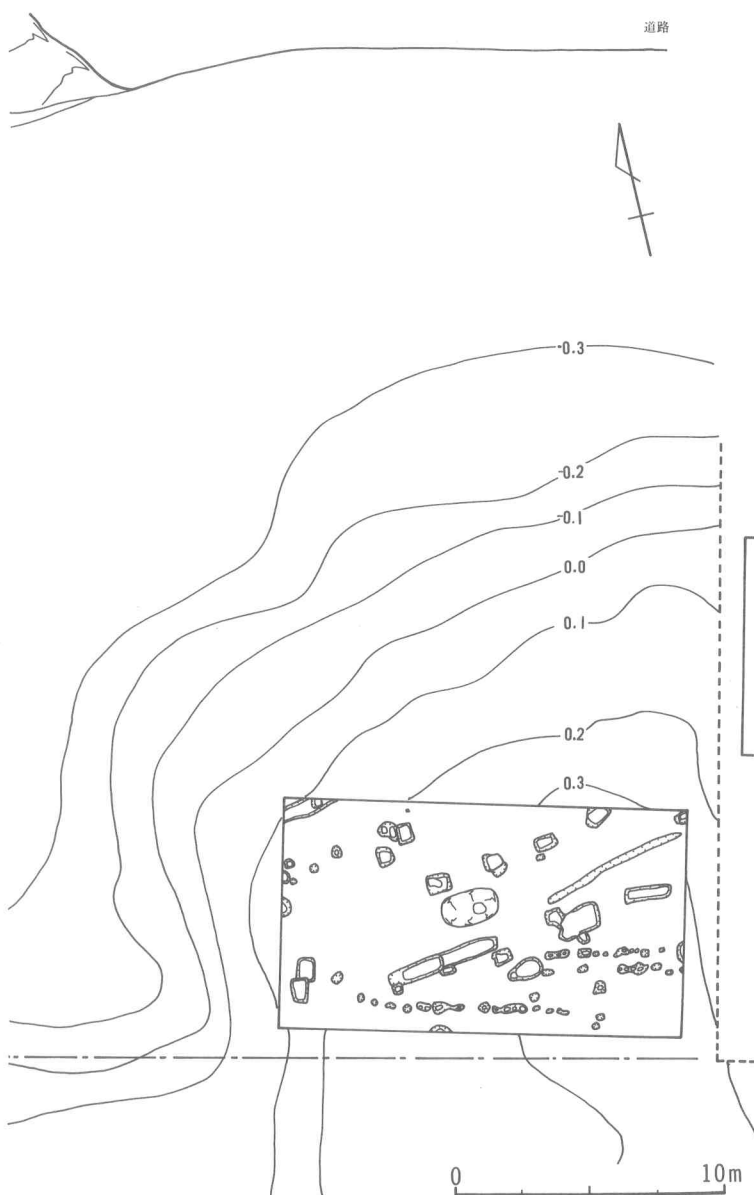
V 南原遺跡E地区の発掘調査 (第3次)

1 E地区の遺構概観 [図版十四] (第30図)

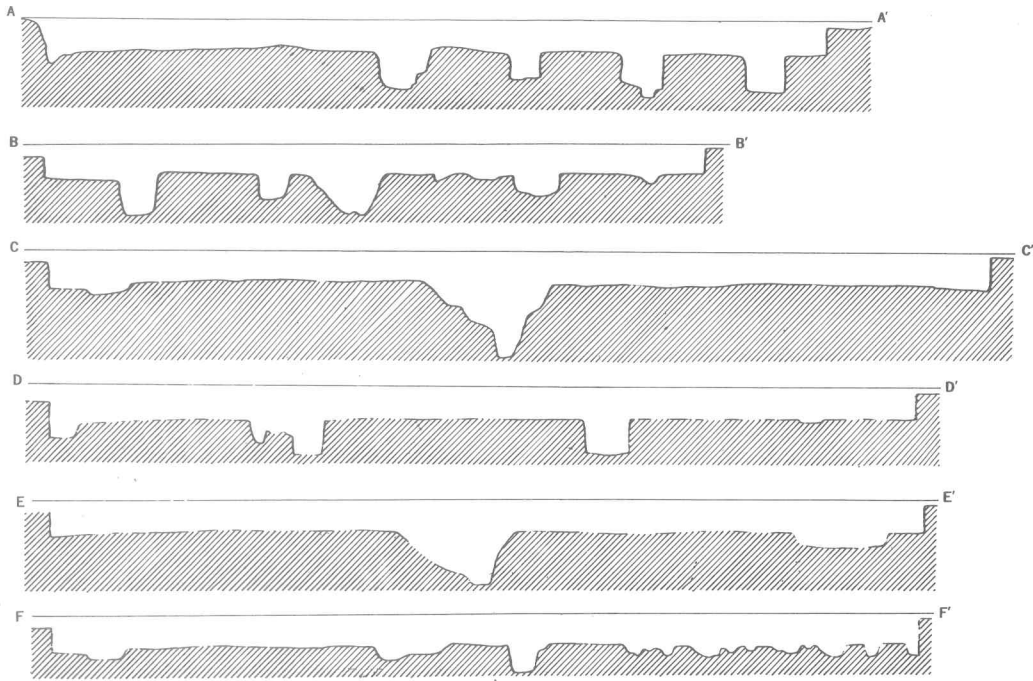
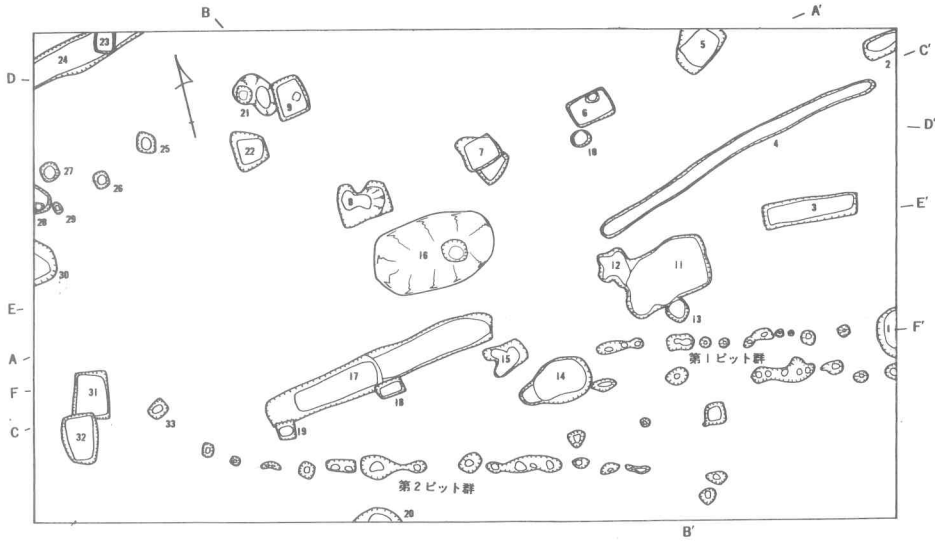
E地区は、北方の菖蒲川に向って傾斜しているが、調査区は、そのうちでも、最も高所に設けた。調査は、トレンチによって始めたが、それぞれのトレンチ内にピット状遺構が検出されたため、より広く調査することが必要であると考え、調査を予定していた畑一枚全面15m×8.50mを調査区とした。

調査区内には、平面形態が、楕円形・長方形・梯形・円形などの数多くのピットが発見された。このうち、調査区北側中央に発見された平面長方形を呈するピットは、規則性を有しており、柱穴列と考えられる。さらに、この遺構の南には、柱穴列に平行して楕円形の大形ピットと長方形の遺構がある。これらの遺構からは、須恵器や土師器が出土した。これらの一連の遺構のほかに、不規則なピット遺構があるが、これらは、さらに調査区を広くしてみなければ、遺憾ながら性格等は明確にならない。

(塩野 博)



第30図 南原地区全測図



第31図 南原E地区遺構全測図

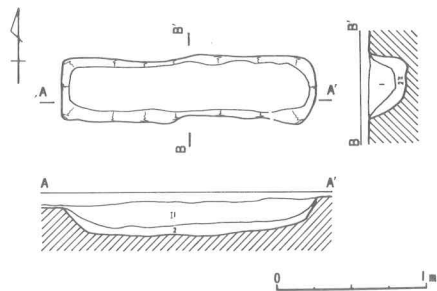
0 4m

2 E地区の遺構各説

南原E第3号土壙 (第32図)

発掘区の東部に検出されたもので、主軸を東西にもち、 $1.70 \times 0.42m$ の長方形プランを呈す。深さは約 $0.25m$ 。覆土は土器、ローム粒子の含有量の多少により二層に分けられるがあまり明瞭ではない。

遺物は、須恵器、土師器の小片が覆土上部から出土した。



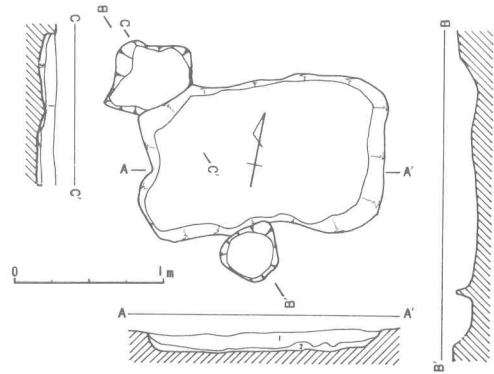
第32図 南原E第3号土壙実測図

1. 黒色土 (ロームブロックを含む)。
2. 1にロームが混入したもの。

南原E第11号土壌 (第33図)

第3号土壌の西側に検出されたもので、主軸を東西にもつ1.65×1.05mの不整長方形プランを呈す。深さは約10cm。北西コーナー部で第12号土壌を切っている。さらに南辺の中央で第13号土壌と切り合っているが、新旧関係は把握できなかった。覆土は、第3号土壌とほぼ同じである。

遺物は、須恵器が壙底から浮いた状態で出土している。第2号土壌と幅・深さは異なるが、主軸の方向、覆土、出土遺物は類似する。



第33図 南原E第11号土壌実測図

- 1 黒褐色土 (ローム粒子を含む)
- 2 茶褐色土 (ロームブロックが霜状に入る)

南原E第16号土壌 [図版十五] (第34図)

発掘区のほぼ中央に検出されたもので、調査を進めてゆくと、この土壌はE地区において特異なものであることが判明した。

規模は、2.18×1.30mで楕円形プランを呈す。ローム上面からピット状になった壙底までは0.95mを計る。主軸は東西にもつ。

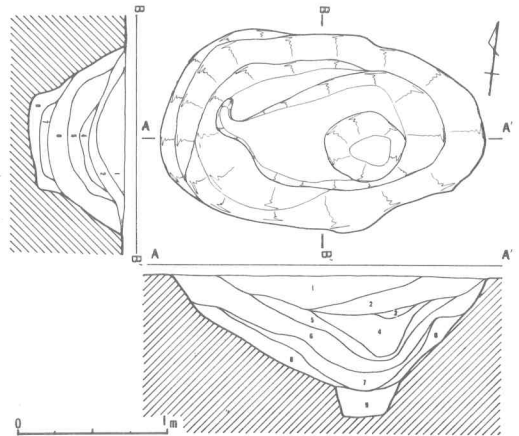
覆土は9層に分けられ、レンズ状の堆積状態を示していた。そのうち、黒褐色土をはさんで、焼土ロームブロックを多量に含み、上面の焼けた厚さ約10cmの赤褐色土層が2層みられた。

遺物は各層より多量に出土した。須恵器がほとんどで、完形に近い坏も出土している。

この土壌は、E地区の他の土壌よりも規模が大きく、また覆土の状態、遺物の出土量においても著しく異なるものである。

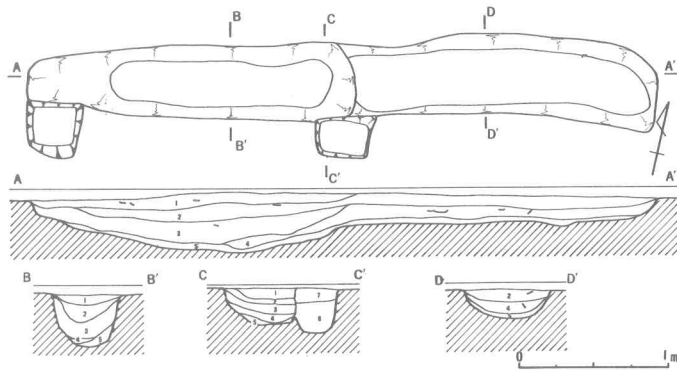
南原E第17号土壌 [図版十六] (第36図)

第16号土壌の南側に検出されたものである。4.20×0.50mの長方形プランを呈し、主軸は北東—南西にもつ。深さは、ローム上面より西側で約40cm、東側で約20cmである。南



第34図 南原E第16号土壌実測図

- 1 茶褐色土 粘性に乏しく、若干のローム粒子を含む
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 3 炭化物 焼土層(黒褐色土)
- 4 黒褐色土 焼土及び炭化物を若干含み、粘性に乏しい
- 5 焼土を多量に含み、灰も若干含む。赤褐色土、ロームブロックも多量に含む
- 6 炭化物、焼土を若干含むが、灰を含まない黒褐色土
- 7 赤褐色土 焼土、ロームブロックを多量に含む
- 8 黒褐色土 焼土、炭化物を若干含む、5より黒い感じがする
- 9 黒褐色土 8と同質だが、粘性が極めて強い、炭化物を多量に含む



第35図 南原E第17号土壙実測図

側長辺の中央と西端には、第18・19号土壙が存在するが、これらは、この土壙を切って造られたものである。

覆土は、5層に分けられる。上部には、焼土粒子およびブロックの混入がみられる。

遺物には、須恵器、土師器の破片がある。

その他の土壙一覧

番号	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
1	円形(?)	径 80	20	土師器	
2	長方形(?)	30×()	25	無	
10	円形	30×35	20	土師器・須恵器	
12	不整形	50×50	12	須恵器	11に切られている
13	円形	径 40	10	無	
14	楕円形	130×78	45	土師器・須恵器	覆土に焼土・炭化物を含む
15	不整形長方形	70×50	40	無	
18	長方形	36×27	30	〃	17に切られている
19	方形	16×16	35	〃	
20	楕円形(?)	径 85	40	〃	
21	楕円形	80×45	40	〃	9に切られている。
22	梯形	72×58	13	土師器	
23	長方形	()×37	60	無	24を切っている
24	溝状	幅 50	40	須恵器	
25	方形	35×32	20	〃	
26	長方形	30×25	16	〃	
27	方形	32×30	30	無	
28	楕円形	()×48		土師器・須恵器	底部にピットをもつ
29	楕円形	23×15	15	無	
30	楕円形	()×80		土師器・須恵器	
31	長方形	85×65	85	土師器・須恵器	
32	長方形	90×65	90	土師器・須恵器	
33	長方形	35×27	20	無	

- 1 焼土ブロック及び焼土粒子を多量に含む黒色土
- 2 ロームの小さなブロック及び少量の焼土を含む黒褐色土
- 3 ロームの小ブロックを多量に含む黒色土層
- 4 ロームと黒色土が混入した層で黄褐色を呈す
- 5 2層に焼土を含まない
- 6 5層とよく似ているが含んでいるロームの量が多い。
- 7 ローム粒子を含む黒褐色土
- 8 ローム小ブロック及び粒子を含む漆黒土

南原E柱穴列 (第31図)

発掘区の北寄りに検出されたものである。(P5~P9)。P7・P8は辺がくずれているが、他のピットは長方形プランを呈す。柱列の間隔は約1.35mで、ほぼ等間隔に並んでいる。P6とP9は底部にピットをもち、土層断面において、中央に柱が存在していた事を物語る土層堆積が観取された。

覆土は黒褐色土にローム粒子およびロームブロックの混入した層が主体であり、人為的に埋められた状態を示していた。とくに底部直上には粘性に富んだ黄褐色土に黒褐色土がわずかに霜降り状に混入した層がある。

遺物は、須恵器、土師器の小片が若干出土したのみであった。

南原E溝状遺構 (第31図4)

第3・11号土壌の北側に検出されたもので、発掘区の北東隅から南西にのびる。長さ5.40×0.25mの規模で、深さは5cmである。

覆土は黒褐色土一層である。

遺物は、須恵器・土師器の小片が若干出土した。

南原Eピット群 (第31図)

発掘区の南側に検出されたものである。上部に灰褐色の攪乱土をのせたものが多く、当初耕作によるものと考えていたが、底部近くに黒褐色のプライマリーな覆土が認められたためピット群と断定した。

規模は、径約30cmほどの円形のもが多く、深さは10~20cmの浅いものである。また、これらのピット群には、2つのまとまりが認められる。すなわち、第1号土壌と第14号土壌の間に二列平行の第1ピット群と、発掘区の南壁に平行して並ぶ第2ピット群である。

遺物は、わずかに須恵器・土師器の小片が出土したのみであった。

(中島 宏)

3 E地区の出土遺物各説

南原E地区土壌出土土器 (第36図)

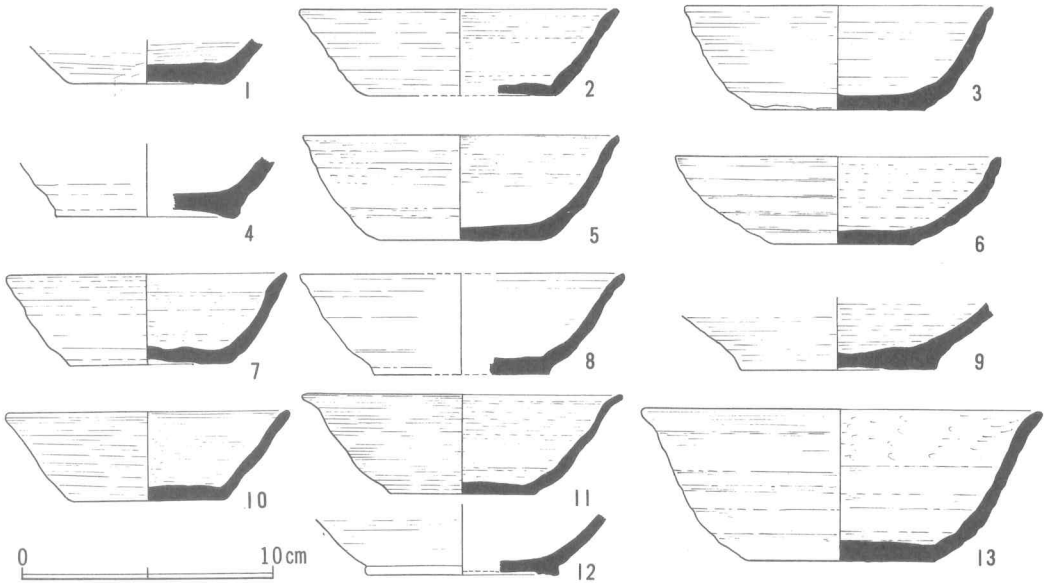
E地区の土壌からは、須恵器で、底部に糸切り痕をのこす坏および、土師器の細片が多量に出土しているが、ここでは、代表的な土壌出土の坏で、実測図作成可能なものを選んで、土壌別にあげる。

1・2は、第3号土壌出土の坏である。1は底部のみである。2の口縁は底部から直線的に開いている。

3は、第14号土壌出土の坏で、口縁部は底部から若干内彎気味に開き、口唇部でやや外反している。

4は、第14号土壌出土の坏底部で、肉厚なものである。なお、若干あげ底になっている。

5~10は、第16号土壌出土の須恵器である。9は、甕あるいは壺の底部である。6は、平底で、口縁



第36図 南原E地区土壙出土土器実測図

部は内彎し丸味がある。口唇部は立っている。7は、坏底に大きな凹凸のある坏で、口縁部はやや内彎している。口唇部内側は、指でつぶされ、稜ができています。底部は、若干あげ底になっている。8は、平底で、口縁部は内彎し、丸味を帯び、口唇部は外反する。10は、平底で、口縁部は外に向って直線的につけられている。

11～13は、第17号土壙出土の坏である。11は平底で、口唇部が大きく外反している。12は、高台付きの灰釉陶器である。13は、口径16cm、身の深さ5.3cmを測る大型の坏である。底は平で、口縁部は底部に近いところが内彎し丸味を帯びているが、直線的にのび、口唇部で外方に曲げられている。

(伊藤 和彦)

VI 結 語

以上、戸田市南原遺跡第2次、第3次発掘調査の概要を記した。最後に、これらの調査結果を整理して結語とする。

竪穴住居跡 この南原遺跡では、第1次調査では竪穴住居跡は発見されなかったが、第2次調査のA地区で4軒、B地区で3軒竪穴住居跡を発見し、さらに、第3次調査のD地区で1軒の竪穴住居跡を発見した。

A地区で発見した竪穴住居跡は、完全なものではなかった。しかも、住居跡の時期を比定するに足る遺物の発見された住居跡は、第3号住居跡と第4号住居跡の2軒である。第3号住居跡は火災にあっており、多量の遺物が残存していた。竪穴の壁は不明確ではあったが、貯蔵穴内で発見された土器と、床面から発見された土器は、時期的には同一である。この住居跡の時期は、五領期でも古式の土師器を伴うものである。また、第4号住居跡は、テラス状遺構を有する竪穴であり、南原遺跡A地区発見の住居跡中では大形のものである。出土土器からみて、第3号住居跡と同一時期のものと考えられる。

一方、他の第1号、2号住居跡から明瞭な遺物の出土はなかったが、第1号住居跡中には、第3号住居跡と同様、焼土や炭化材が残存しており、火災にあったものであり、第3号住居跡とは、同時期に在ったものと考えられる。また、第2号住居跡は、第4号住居跡と同様に、南原第4号方形周溝墓に切られており、第4号住居跡と同じ時期に在ったものと考えられる。

したがって、これらA地区の4軒の住居跡は、同一時期のものと考えてよからう。

B地区で発見された竪穴住居跡（第5・6・7号住居跡）は、出土した土器をみると、和泉期のものであり、A地区の住居跡とは、同一時期のものではない。また、D地区の竪穴住居跡（第8号住居跡）は、カマドを有するものであり、出土遺物も若干ではあったが、真間期の土器が発見されている。

このように、南原遺跡発見の住居跡は、地区ごとに、時期が違うものであり、おそらく各時期ごとに大集落が営まれたものではないものと思われる。

方形周溝墓 第1次調査では、A地区において1基の方形周溝墓を発見した（註1）。そして、この南原遺跡内には、まだ数基の方形周溝墓があろうと推定していたが、今回の第2次、第3次発掘調査でも、合計6基の方形周溝墓を確認した。これらの中には、全堀できたものと、一部分の調査で終わった遺構もあったが、おおよそ、南原遺跡内での分布状況を握むことができる。すなわち、方形周溝墓が発見される地区は、A地区を中心にして、B・D地区であり、A地区から北へはなれたE地区には発見されていないことからして、南原遺跡内でも方形周溝墓の占地は限定されているようである。

また、方形周溝墓の配列は、A地区においてみるかぎり、かなり任意性が観取される。その中でも、南原第3号方形周溝墓と、第4号方形周溝墓においては、ほぼ規則正しく配置されており、また、形態からみても、方的要素の強いものであり、方形周溝墓の本来の形態・配列を示している。これに比し、南原第1号方形周溝墓や第6号方形周溝墓は、戸田市鍛冶谷新田口遺跡でも発見されているように方形の角が丸くなった形態を呈している。さらに、南原第3号方形周溝墓を切っている第5号方形

周溝墓にいたっては、直線的部分も一部に観取されるにしても、その形態はすでに方形ではなく、円形化している。また、溝も狭くなり、出土遺物は、きわめて少ない。

しかしながら、D地区で発見された南原第7号方形周溝墓の東溝は、直線的で、溝の断面も逆台形を呈し、鍛冶谷新田口遺跡の新田口第1号方形周溝墓と同様であり、しかも、溝内からは、多量の破砕されたり底部を欠いた土器が出土している。

このような、方形概念の消失と出土遺物の関係、すなわち、方形周溝墓の形質的变化については、先に鍛冶谷新田口遺跡で論じたこともあるが(註2)、南原遺跡における第5号方形周溝墓の出現をみて、さらに確実なものになった。

南原遺跡方形周溝墓出土の遺物は、土器が中心であるが、南原第3号方形周溝墓と第7号方形周溝墓から出土している。第3号方形周溝墓の土器は、高環形土器の脚部であるが、五領Ⅱ期のものと考えられる。第7号方形周溝墓からは、多量の土器が出土した。総体的にみれば、五領Ⅱ期の土師器である。この中に混じて、弥生時代後期初頭の久ヶ原式土器があった。この遺跡内はもとより現時点では、附近にこの時期の遺構や遺物は発見されておらず、偶然この溝内に入ったものとは考えられない。このような組合せは、かつて野田市三ツ堀遺跡第二号住居跡(註3)で指摘されたが、この方形周溝墓が築造された当時、築造者が溝の中に入れたものと考えられる。

円形周溝墓 A地区から発見された周溝は、推定外径18mの小規模な円形の周溝である。しかも、溝内に鬼高Ⅰ期の土器を装置していた。県内での類例では、桶川市西台遺跡(註4)、東松山市諏訪山5号墳(註5)があげられる。西台遺跡の例は、周溝の内径約10.5m、プランは正確な円形を呈さず、南から西にかけて、やや直線的になり、北から東にかけて、その円弧が急になる不整形な扁円形を呈している。そして、周溝内からは、内部に赤色の彩色を施した環形土器と、その北側約1mのところから管玉が発見されている。また、周溝外から、全面に彩色された環形土器が2個並べて装置された状態で出土している。これらの土器は、鬼高Ⅰ期のものであった。

東松山市諏訪山5号墳は、長径14.5m、高さ60cmで、周溝のプランは、北側が直線的で、他は円形となる不整形円形を呈している。周溝底からは、鬼高Ⅰ期の環・埴・埴・壺が出土している。内部主体は、長さ3.38m、幅1.50mの土壙で、木棺直葬と推定されている。

さて、南原第1号円形周溝も、これらと同様「円形周溝墓」と呼んでさしつかえないものと思われる。

この南原遺跡では、第1次調査で発見した埴輪を装置した古墳と、この円形周溝墓が存在するが、ここでは、この円形周溝墓を、円形化した南原第5号方形周溝墓の存在等から社会的変化にともなう推移型として把えておき、古墳との相違を明瞭にした円形周溝墓の概念規定については、後日にしたい。

柱穴群とピット群 第1次調査において、A地区では溝状遺構を発見し、溝内から若干の陶器片を検出した。第2次調査では、B地区においてピット群を発見した。しかし、調査範囲が狭いため、これらのピット群について、その配列状態を把握するまでにはいたらなかった。しかしながら、これらピット群の周辺から出土した須恵器片や土師器片等から12世紀代に造られたピット群と推定される。

さらに、E地区で発見された平面方形の掘立形の柱穴列は、柱間2.10m（7尺）、南向きの建物遺構である。さらに、この柱穴列の南側に、建物と平行して平面楕円形のピットや長方形遺構がある。これらの遺構は、建物遺構に付属する施設と考えられる。

この建物遺構と、その他の付属遺構の時期比定であるが、付属遺構内からの出土土器をみると、国分期の新しいものであり、12世紀中頃（平安時代後半）のものと考えてよからう。

したがって、この南原遺跡地内には、桃井屋敷跡所在説があるが、確実に中世初頭（平安時代後期以降）の土豪の館があったことが明らかになってきた。今後は、さらに、周囲をめぐる掘遺構の発見を待ちたい。

以上で、南原遺跡第2次・第3次発掘調査結果の整理を終るが、この南原遺跡については、今後、第4次調査として、F地区を予定しており、この調査の終了をみて、問題点として残してきた。集落跡と方形周溝墓の関係、方形周溝墓の展開と円形周溝墓への推移、さらに、これと並行期に存在する埴輪を伴う古墳の性格、また、中世初頭の館跡の存在からみた戸田の開発など、南原遺跡の総括を試みたいと考えている。

（塩野 博）

註1 塩野 博・伊藤和彦「南原（高知原）遺跡第1次発掘調査概要」戸田市文化財調査報告Ⅲ 昭和45年3月。戸田市教育委員会

註2 塩野 博・伊藤和彦「鍛冶谷・新田口遺跡—方形周溝墓群の調査—」戸田市文化財調査報告Ⅱ 昭和44年3月。戸田市教育委員会

註3 下津谷達男・横川好富「野田市三ツ堀遺跡」野田市文化財調査報告第1冊、野田市郷土博物館。

註4 塩野 博・増田逸朗「西台遺跡の発掘調査」桶川町文化財調査報告Ⅳ 昭和45年3月、桶川町教育委員会。

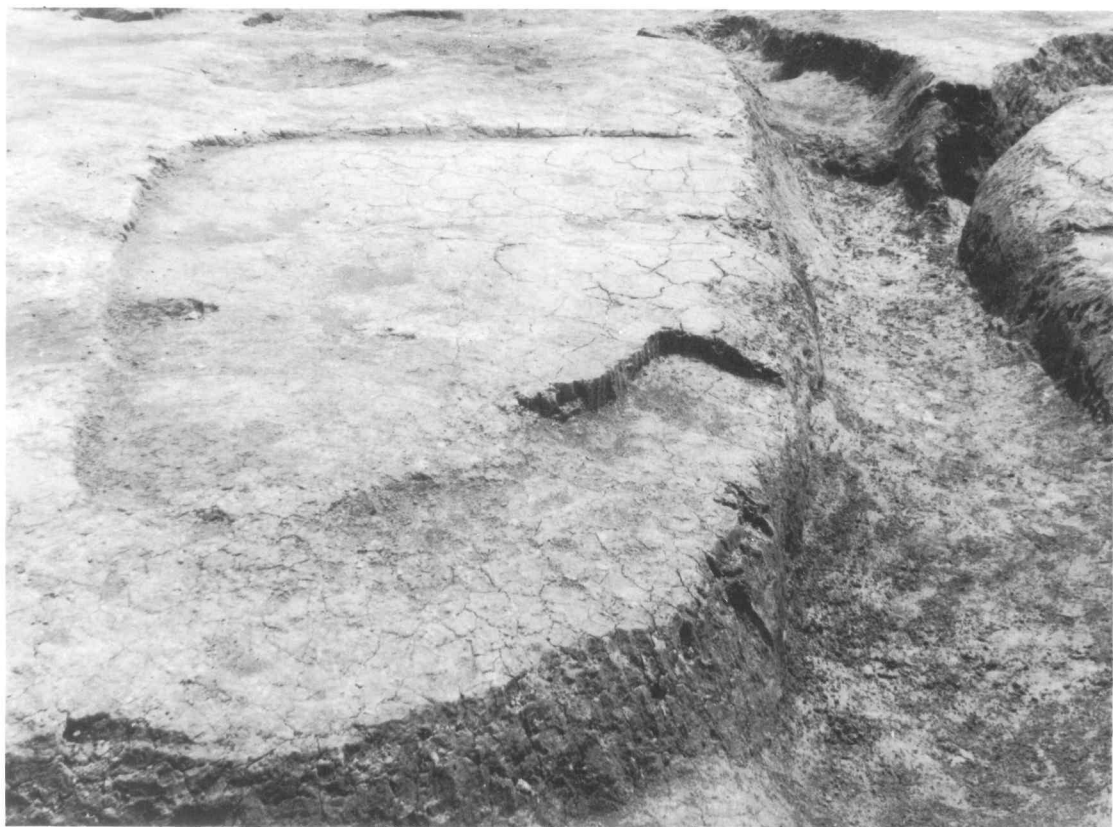
註5 金井塚良一他「諏訪山古墳群（第1次発掘調査報告）」東洋大学考古学研究会発掘調査報告第1集 昭和45年5月 考古学資料刊行会



(1) A地区(2次)遺構全景



(2) 南原第1号住居跡



(1) 南原第2号住居跡



(2) 南原第3号住居跡



(1) 南原第3号住居跡(床面)土器出土状態



(2) 南原第3号住居跡(貯藏穴内)土器出土状態



(1) 南原第4号住居跡



(2) 南原第4号住居跡



(1) 南原第3号方形周溝墓



(2) 南原第3号方形周溝墓南溝



(1) 南原第4号方形周溝墓



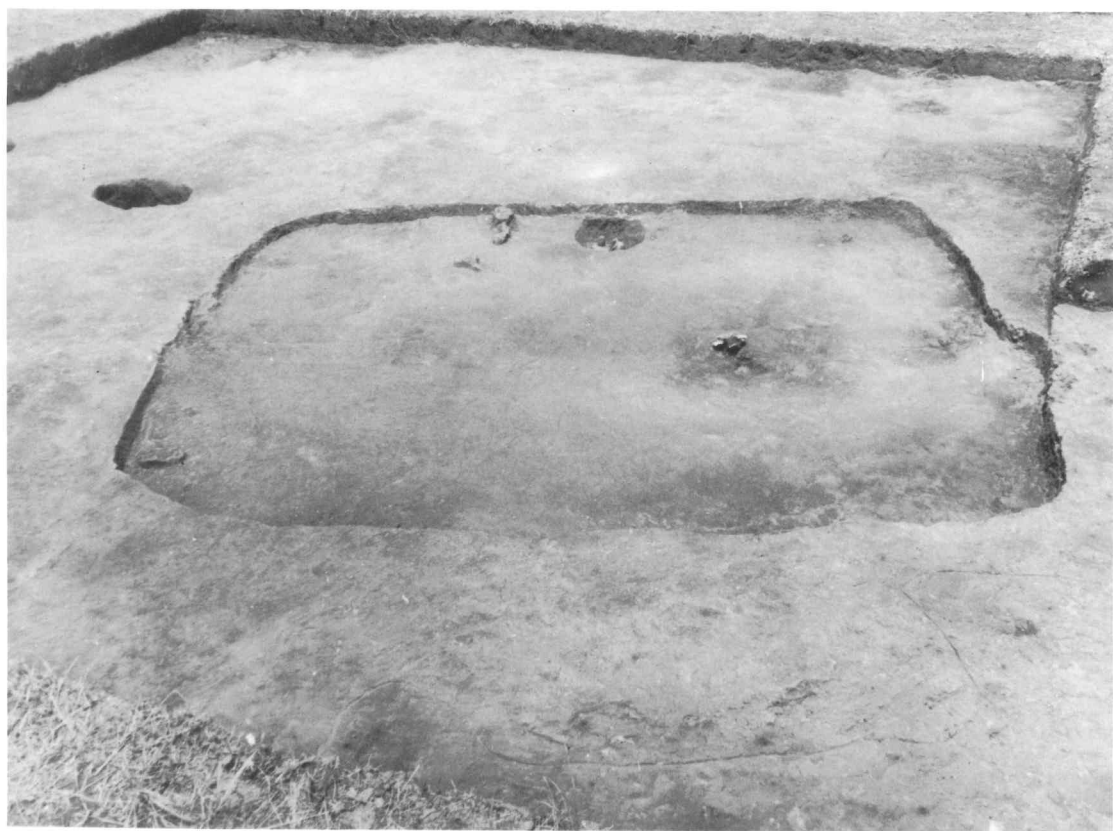
(2) 南原第5号方形周溝墓



(1) 南原第2号方形周溝墓・南原第1号古墳周堀



(2) 南原第1号円形周溝墓および土器出土状態



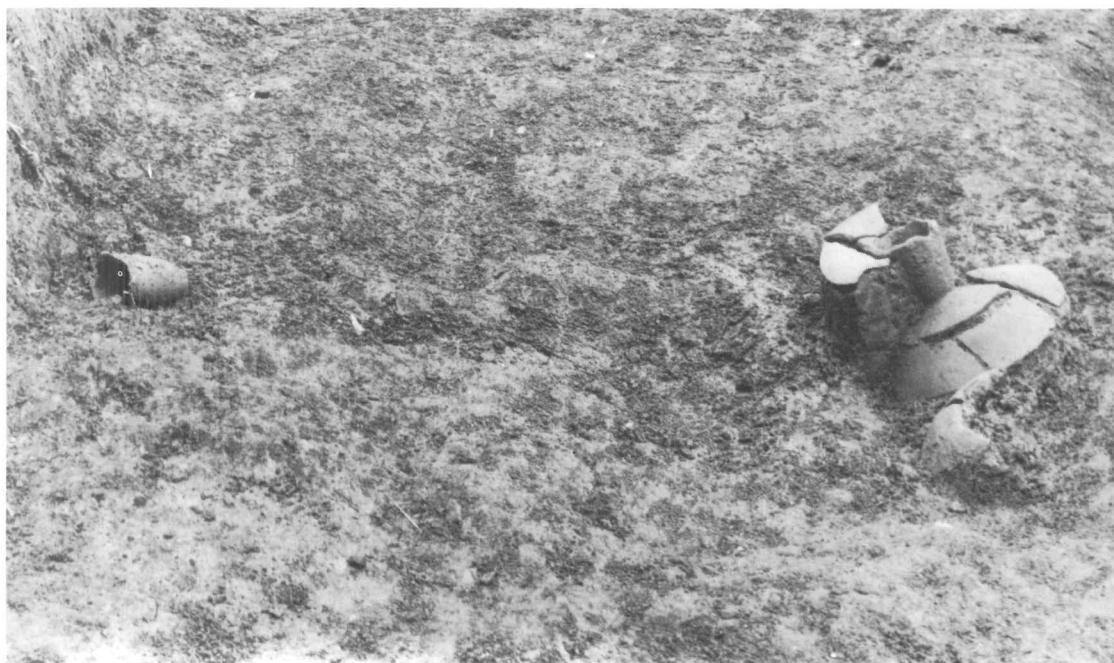
(1) 南原第5号住居跡



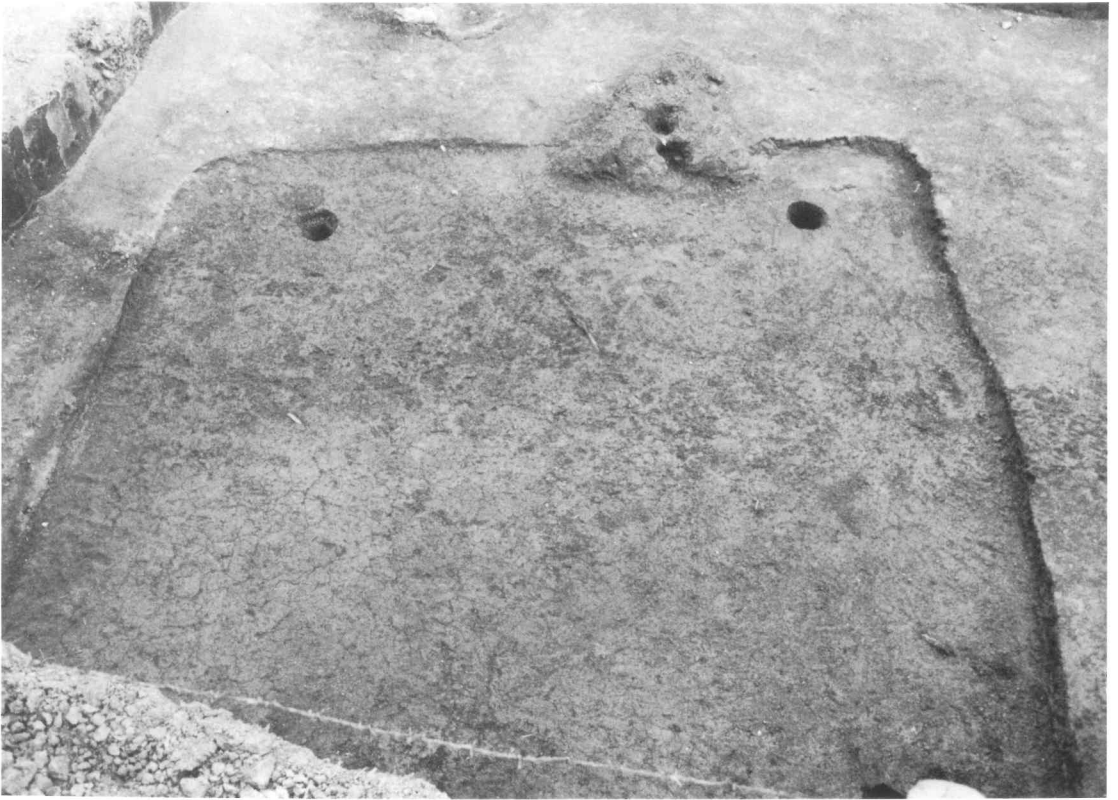
(2) 南原第6号方形周溝墓



(1) 南原第5号住居跡ピット内土器出土状態



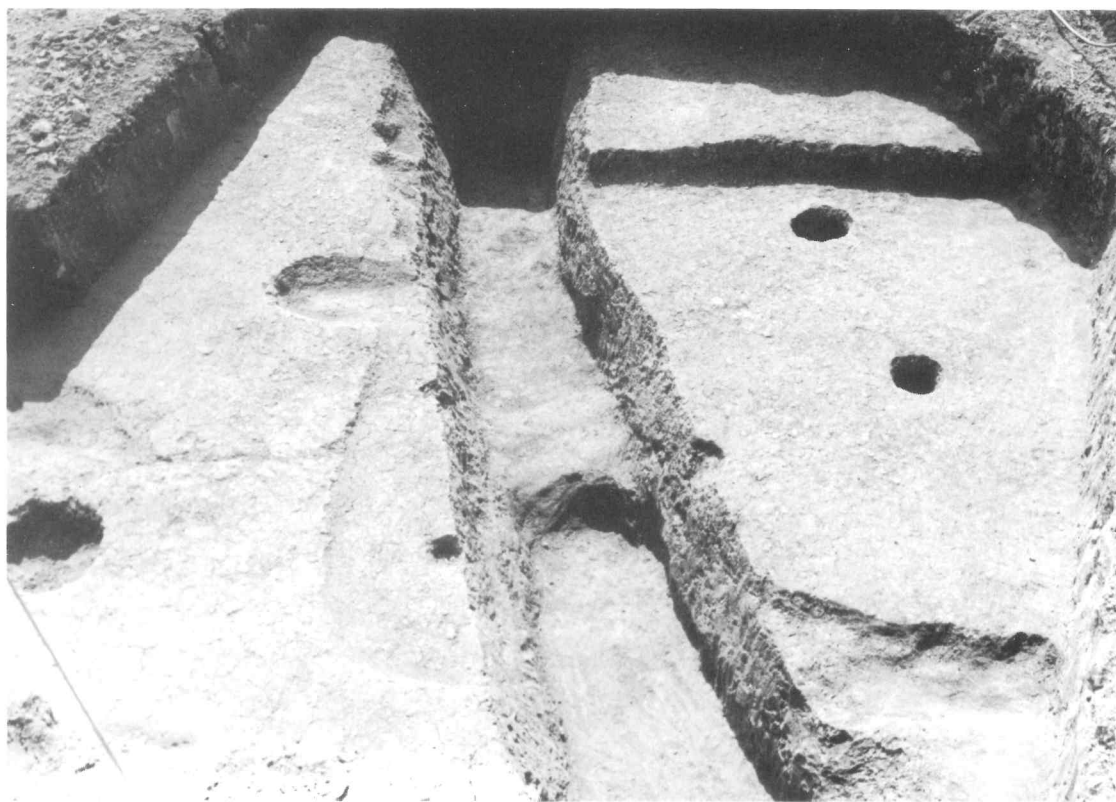
(2) 南原第6号住居跡土器出土状態



(1) 南原第8号住居跡



(2) 南原第8号住居跡



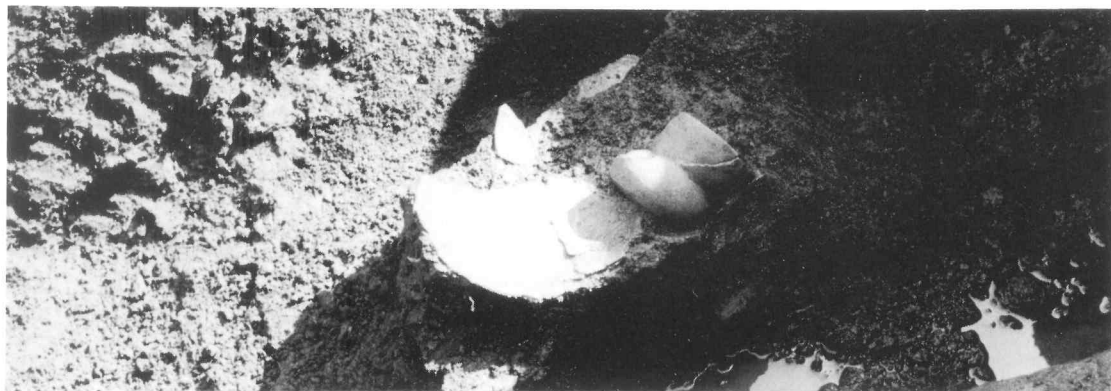
(1) 南原第7号方形周溝墓



(2) 南原第7号方形周溝墓周溝断面



(1) 南原第7号方形周溝墓溝内土器出土状态



(2) 南原第7号方形周溝墓溝内土器出土状态



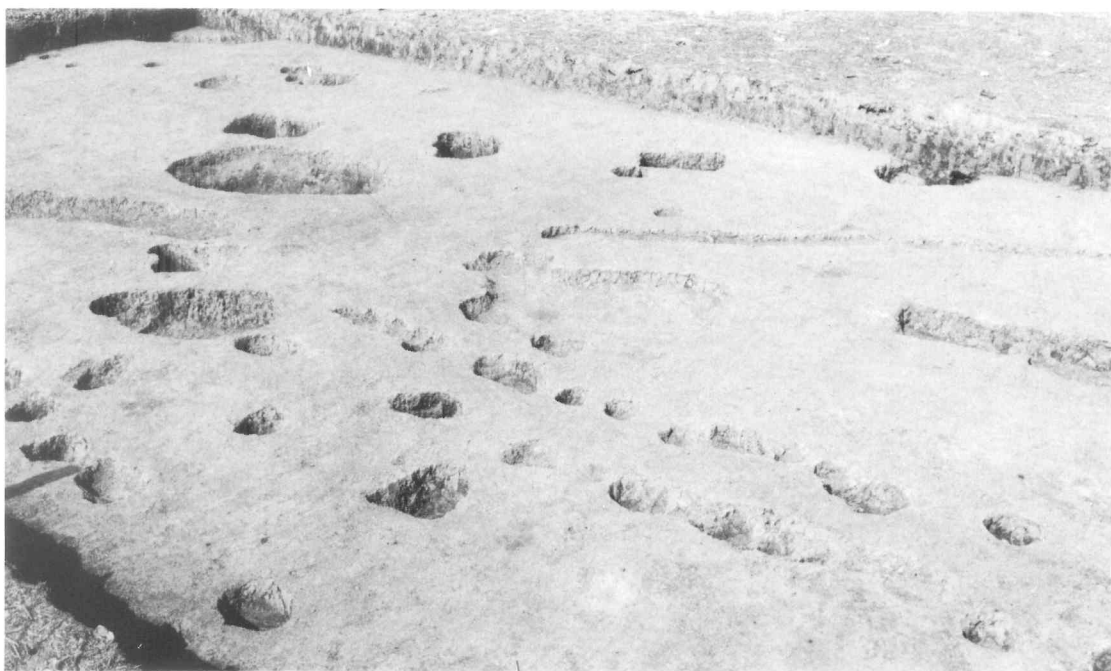
(1) D地区大形ピット



(2) D地区大形ピット



(1) E地区内調査区全景



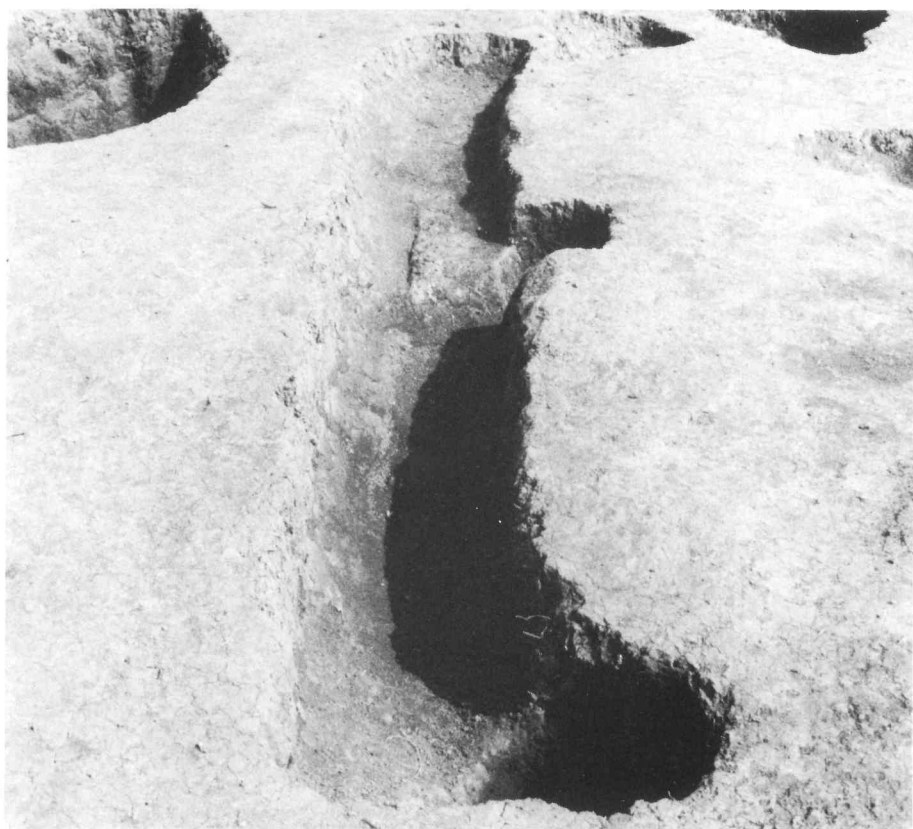
(2) 方形柱穴列



(1) 第16号土坑全景



(2) 第16号土坑内土器出土状態



(1) 第17号土坑全景



(2) 第17号土坑内土器出土状态

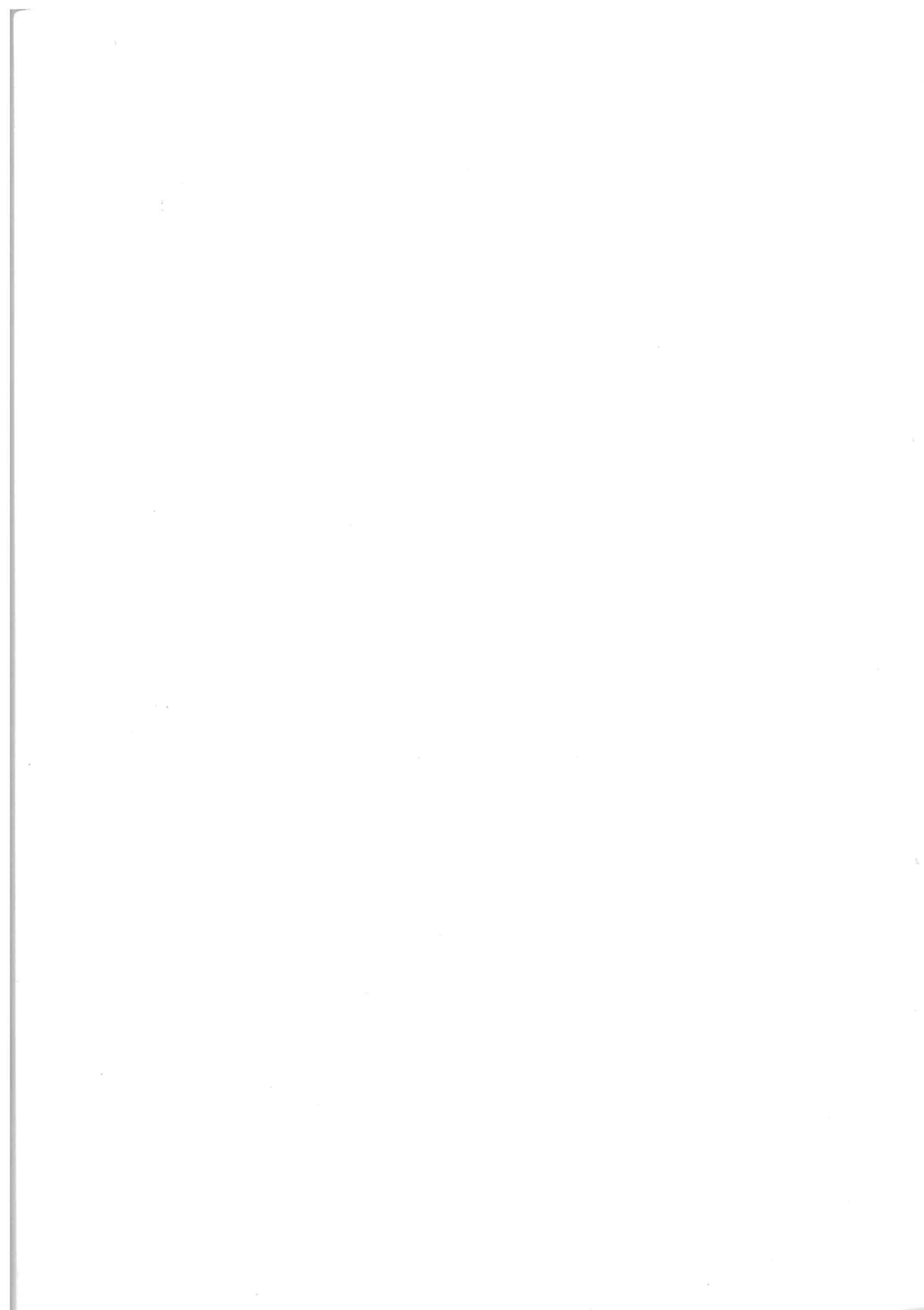
4
5

4
5

1
J

1
J





印刷 昭和47年3月25日

発行 昭和47年3月30日

戸田市文化財調査報告 V

南原（高知原）遺跡第2・3次発掘調査概要

発行 埼玉県戸田市教育委員会

印刷（資）秀飯舎印刷所